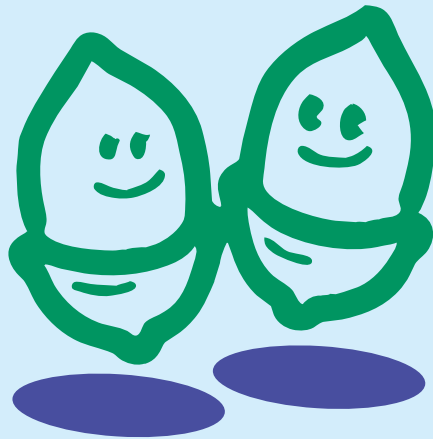


兵庫県立南但馬自然学校

# 研究紀要 第18号

研究報告 長期宿泊を伴う体験活動を通して児童の意識を探る

研究報告 引率教員の自然学校への取組とふり返りに関する調査から今後の自然学校を考える



兵庫県立  
南但馬自然学校  
HYŌGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKŌ  
*Nature Education Center*

令和8年3月

## 巻 頭 言

本校は、兵庫県の「自然学校推進事業」の中核施設として、これまで数多くの児童と教職員を迎えてきました。自然という大きな学びの場の中で、子どもたちが仲間と共に過ごし、葛藤し、協力し、挑戦し、そして自らの成長を実感する——その営みが推進事業として37年間、本校開校から31年間にわたり積み重ねられてきたことは、本校の誇りであり、本県にとって大切な財産です。

いま学校現場を取り巻く環境は大きく変化しています。価値観や家庭環境の多様化、社会のデジタル化が進むなかで、感染症流行を経たことによる生活リズムや人間関係づくりの揺らぎなど、子どもと学校をめぐる状況は一層複雑になりました。だからこそ、他者と生活を共にし、五感を使って自然を体験することの意味は、従来以上に重みを増しています。

今年度の研究紀要では、二つの研究を収録しました。一つは「長期宿泊体験を通して児童の意識を探る」研究、もう一つは「引率教員の自然学校への取組とふり返り」に関する研究です。これらの研究は、児童が体験の中でどのように変容するのか、そして教員が自然学校の教育的価値をどのように捉えているのかをそれぞれ異なる角度から示すものであり、双方の結果をあわせて読むことで、自然学校の教育的価値をより立体的に捉えることを可能にしています。

児童調査からは、多くの子どもが自然学校に対して「楽しみ」と「不安」を同時に抱えて参加していること、不安は活動の過程でしだいに和らぎ、仲間と協力してやり遂げた経験が自信や信頼へと結び付いていくことが確認されました。さらに、自然を表す子どもたちの言葉が抽象から具体へと変化していく過程も見いだされ、体験が認知と言語の豊かさを促すことが示唆されています。

一方、引率教員調査では、自然学校が児童理解の深化、学級のまとまりの向上、特別な配慮を要する児童へのかかわりの見直しなど、日常の教育と連続した学びの場になっていることが明らかになりました。同時に、安全確保、事前・事後の学習設計、教員間の連携、長期宿泊に向けた準備や調整の工夫など、今日の学校を取り巻く状況が自然学校の運営にも影響していることも共有されています。

こうした社会的・教育的背景と研究結果を踏まえると、自然学校は「子どもと教員が共に育つ」学びの場であることが改めて浮かび上がります。ここに、各校で入念な準備と綿密な連携を重ね、現地では一人ひとりの変化に寄り添いながら安全と学びを支えてくださっている引率教員の皆様に、心より感謝申し上げます。皆様の専門性と献身的なご尽力が、子どもたちの成長の礎であり、本県の体験教育の質を支える力です。

自然の中で他者と生活を共にし、五感を使って活動に取り組む経験は、子どもたちの心に深い印象を残します。見たことのない景色に触れ、夜の静けさや朝の冷気に気づき、仲間と励まし合いながら活動をやり遂げる——こうした積み重ねは、学びへの意欲や自己肯定感、協調性といった“生きる力”の基盤となるものです。本紀要が、自然学校の意義を再確認し、より良い体験活動の実現に向けた対話を促す一助となれば幸いです。今後も、本校の使命であるこころ豊かな青少年の育成を図るため、職員一同、研究と実践を重ねてまいります。

令和8年3月

兵庫県立南但馬自然学校

校長 西 岡 智 也

## 令和6・7年度紀要刊行に寄せて

本号では、主に令和7年度（2025年4～12月）に兵庫県立南但馬自然学校において、自然学校を実施された学校の児童、引率教員のふり返りを材料にしています。長い準備期間と4泊5日の集団宿泊を伴う自然学校を終えた児童が感じていること、その運営に尽力した先生方が実感した自然学校の意義や課題を集約して記録に残し、将来につなげていくことが本誌の使命だと考えています。約40年間継続され兵庫県の教育文化になっている自然学校も、急速な生活環境、教育環境の変化に直面して、その現実的な在り方に様々な意見が交わされています。本誌が自然学校の子どもたちに与える価値を再認識する一助になれば幸いです。では、自然学校の価値を我々はどのように共有すればよいのでしょうか。

「Education is what remains after one has forgotten everything he learned in school.」、これは物理学者アルベルト・アインシュタインが、教育とは何かという問いに答えたものです。彼は「学校で教わったことをすべて忘れ去ったときに残るものが教育である」と述べています。みんないずれ学校から離れ、それまで受けた教育も思い出の一つになっていきます。そこで教わった知識や技能も忘れるだろうし、そもそもそれらがいつか遺物になる時代です。10年20年後に何が生きる力になるのか、AIが隆盛する今、特に考えさせられます。

一方、自然学校では努力、我慢、失敗、葛藤、折合い、友情、協力、達成、歓喜、出会い、不安、感謝という学校で学ぶべきものが実体験を伴って象徴的に展開されます。筆者が所属する大学の学生の中には、自然学校の指導補助員を希望する者がいます。彼等に共通するのは自分が自然学校から得て大学生の今に至るまで残っているものを今の子どもたちに伝えたいという熱量だと感じています。そして、その熱量がそれぞれの個性を生かした人生に向かわせていると思います。成長し学校のことを忘れても、血となり肉となる体験の提供が自然学校の一つの意義ではないでしょうか。兵庫県の自然学校が文字どおり、子どもたちが自然を再発見し仲間と共に生きていることを実感する人生初期の貴重な機会になることを望みます。

末尾になりましたが、調査に御協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

令和8年3月

兵庫県立南但馬自然学校

調査・研究委員会

委員長 高見和至

# 目次

巻頭言

研究報告 長期宿泊を伴う体験活動を通して児童の意識を探る・・・・・・・・・・ 1

研究報告 引率教員の自然学校への取組とふり返りに関する調査から今後の  
自然学校を考える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22



長期宿泊を伴う体験活動を通して児童の意識を探る

## Exploring children's awareness through experiential activities involving long-term stays

深田東磨<sup>1</sup>・福岡麻衣<sup>1</sup>・伊原久美子<sup>2</sup>・亀山秀郎<sup>3</sup>・石丸京子<sup>4</sup>

<sup>1</sup>兵庫県立南但馬自然学校 <sup>2</sup>大阪体育大学

<sup>3</sup>認定こども園七松幼稚園 <sup>4</sup>尼崎の森中央緑地パークセンター

---

### 1 調査の目的

兵庫県が実施する「自然学校推進事業」は、本年度で 37 年目を迎え、児童生徒の発達段階に応じて体系的に推進する兵庫型「体験教育」の柱の一つとして実施している。

兵庫県立南但馬自然学校（以下、本校）では、平成 29 年度から「五感を使った自然にふれる体験活動」が児童に及ぼす学習効果を検証しており、平成 31 年度からは、各アクティビティと各教科等との関連についても整理してきた。

前回の研究報告（文献[1]）では、対象アクティビティを実施した児童及び教員による「ふり返り（アンケート）」を分析し、活動の質の向上に寄与する示唆及び今後の自然学校を計画する上で参考となるモデルを示唆した。

一方、人間関係の希薄化の他、保護者や子ども自身が希望するほどの体験ができていないことに加え、コロナ禍を経て青少年の体験活動が減少している現状（文献[2]）を踏まえ、本県の特色である兵庫型「体験教育」の柱の一つである自然学校のさらなる充実に向け、意義と魅力の再確認をするため、令和 7 年 7 月には兵庫県教育委員会が自然学校魅力発信シンポジウムを開催した。

そこで、本研究では、自然学校を体験した児童による「ふり返り（アンケート）」を分析し、児童の意識を探ることで、児童の視点から観る自然学校を明らかにすることにより、現在実施されている自然学校推進事業の意義と魅力を再度示唆することを目的とする。

### 2 調査方法

#### (1) 調査対象

令和 7 年度に本校を利用した小学校及び義務教育学校の 5 年生児童（以下、児童）を調査対象とした。

団体数：59 団体（92 校）

児童数：4,046 人

#### (2) 調査内容

長期宿泊を伴う体験となる自然学校において、児童が、実施前、期間中それぞれにおいてどのような意識があるのかを、自然学校実施後に調査した。（児童の特性により回答できなかった児童もいるため、実際の利用児童よりも回答数が少ない）

##### 質問項目について

本研究においては、児童が質問項目に対しどのように感じたのか、どのような気持ちを抱いたのかなどを選択し傾向を明らかにすることに加え、必ず「児童が考える～は何か」「どのようなことが～なのか」などの具体を記述することにより、短文長文問わず児童の考えが分かるようにした。

#### (3) 回収方法

自然学校実施後に各利用校に送付する依頼文にある、各利用校専用の回答 Web ページにリンクしている二次元コードをタブレット等の端末で読み取り、回答した。

#### (4) 調査手順

本校調査・研究委員会により、どのような児童の意識を探り明らかにしたいのかが明確になるよう質問項目を考えた。

次に、回答者の回答に係る労力及び回答データの回収に係る手間を鑑み、Microsoft Forms により回答用の Web ページを作成した。

回収データは、選択項目はデータを表に整理しグラフ化、自由記述項目はテキストマイニングするため、記述内の使用ワードを揃えるクレンジングを実施した。

クレンジングについては以下のとおりである。

- 例) ・ともだち、友だち → 友達  
・皆、皆んな → みんな  
※同じ単語は平仮名もしくは漢字表記に統一  
・鹿 → シカ  
※動物名及び植物名はカタカナ表記に統一  
・基地、隠れが、かくれが、遊具 → 隠れ家  
※本校の活動名に統一

その他、誤字脱字についても修正した。

## (5) テキストマイニングについて

ア 使用ソフト ユーザーローカルテキストマイニングツール  
(<https://textmining.userlocal.jp/>)

### イ 読み取り方

自由記述から抽出したキーワードについて、出現頻度の高いワードが大きく表示される。例えば、図 2 では「場所」の出現頻度が高く、次いで「生き物」「動物」となる。ソフトの集計であるため、「会えない」が「会える」と表記されるなど、ワードの表記に実際の記述とずれが生じている場合がある。その場合は、図の下に解釈を記載している。

## 3 調査結果及び考察

### (1) あなたが普段生活している場所（住んでいる家の周りや通っている学校の周り）は自然豊かな場所だと思いますか。あなたにとって「自然」とは何ですか。

#### ア 質問の目的

自分が生活している環境について、児童がどのように感じているのか。また、「自然」に対し、どのようなイメージを抱いているのかを探る。

#### イ 調査結果

##### ① 普段生活している場所は自然豊かな場所だと思うか。

「思う」「やや思う」「あまり思わない」「思わない」の4つの選択肢で問うと、表 1 及び図 1 のような結果となった。

表 1 普段生活している場所は自然豊かな場所だと思うか

思わない	あまり思わない	やや思う	思う
206	632	1,486	1,722

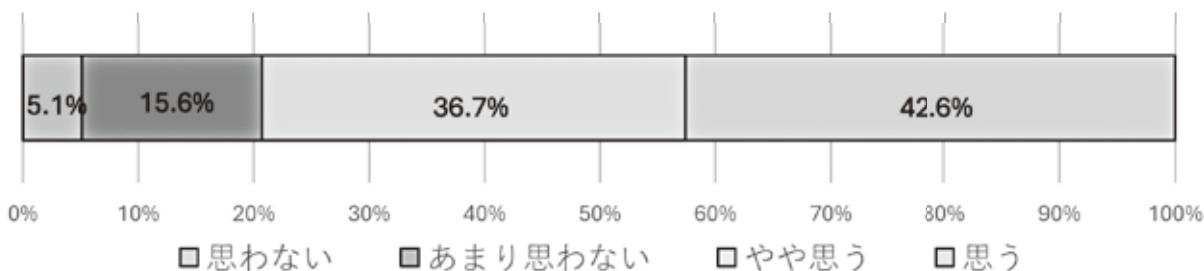


図 1 普段生活している場所は自然豊かな場所だと思うか（児童）

表 1 及び図 1 より、「思う」「やや思う」を合わせ 79.3%の児童が自分の生活圏においては自然豊かだと感じていることが分かる。

② あなたにとって「自然」とは何か。

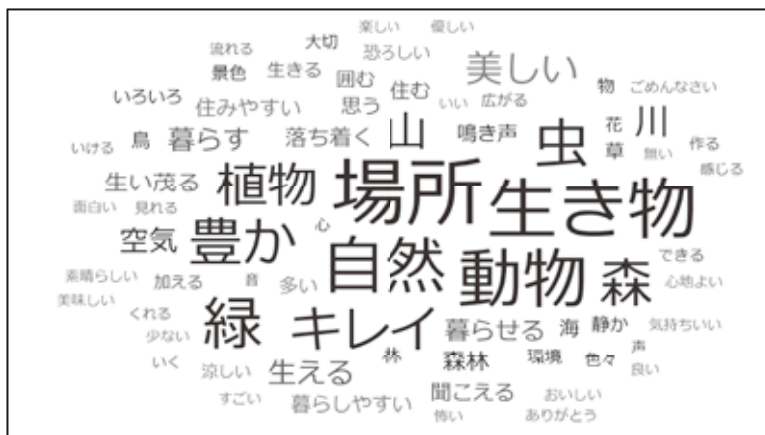


図 2 自由記述より抽出されたキーワード (3(1)イ②)

自由記述には、「いろいろな昆虫や植物がいて豊かな場所」「緑が多く、景色がキレイで、静かな場所」といった表現が多かった。そのことを踏まえ図 2 から分かることは、場所や生き物といった抽象的なものを自然として表現していることが分かる。

他には、「木や虫たちを大切にしないとダメだと思います」「いつまでも守らなければいけないもの」といった意見があり、自然を保護する必要性が訴えられていた。また、「心を落ち着かせることができるので偉大な力だと思います」「とてもキレイで美しい。心が穏やかになり落ち着く」といった感想から、自然が人々に与える癒しの効果があると感じている児童がいた。さらに、「キレイだけど危険なところもある」「危険でもあり美しいこともある」といった表現から、自然には美しさだけでなく、危険も伴うことが認識されている記述があった。

ウ 考察

児童が思い浮かべる身の回りの「自然」は、「緑が多く」「豊かな場所」など抽象的な表現が多く、これは、自身の生活環境に当たり前にあるものを改めて問われたことで、その時に想像したもの、印象的なものを記述しているのではないかと考える。例えば、自身が生活する住宅街に流れる川を想像して自然があると感じるなどである。以上より、この問いを児童に投げかけることで、身の回りの環境に対し改めて目を向けるきっかけとなったことが窺える。

また児童にとっては、生き物の豊かさ、大切さ、心の安らぎ、危険性などを踏まえた環境が「自然」とであると認識していることが分かった。

(2) 自然学校に行く前は、楽しみでしたか。

ア 質問の目的

自然学校が楽しみだったのかどうかを問うだけではなく、どのようなところが楽しみだったのか、もしくはどのようなところが楽しみではなかったのかを問い、自由記述とすることにより、行く前の児童の内面を探る。

イ 調査結果

① 行く前は、楽しみだったか。

「楽しみだった」「少し楽しみだった」「あまり楽しみではなかった」「楽しみではなかった」の 4 つの選択肢で問うと、表 2 及び図 3 のような結果となった。

表 2 自然学校に行く前は、楽しみだったか

楽しみではなかった	あまり楽しみではなかった	少し楽しみだった	楽しみだった
164	344	749	2,789

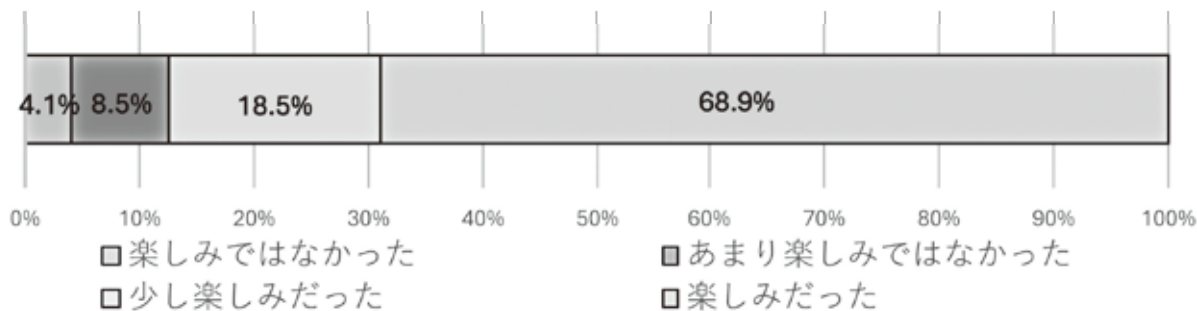


図3 自然学校に行く前は、楽しきだつたか

表2及び図3より、87.4%の児童がポジティブな回答をした。大多数はポジティブに感じている一方で、少数ではあるが12.6%の児童がネガティブな感情を抱いていることが分かる。

② どのようなところが楽しきだつたのか。

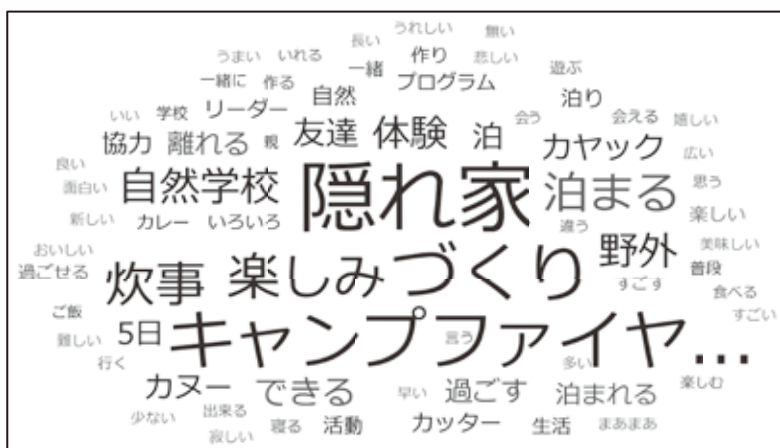


図4 自由記述から抽出されたキーワード (3(2)イ②)

「楽しきだつた」「少し楽しきだつた」と回答した児童に聞いたところ、「隠れ家づくり」「キャンプファイヤー」など、様々なアクティビティへの期待が強調されていることが図4から分かる。実際の記述からは、「カッター、カヌー、カヤック体験」や「野外炊事」が楽しきであることも多く、「自然を観察できるのが楽しきでした」と自然観察への期待を寄せる児童もいた。また、「友達と一緒に居れること」や「友達と泊まること」が楽しきという記述から、共同生活への期待も窺える。「親から離れること」や「自分たちだけで生活すること」が初めての経験であり、「ドキドキして楽しきだつた」との感想から自立への期待も確認できる一方で、「少し不安だつたけど、楽しきだつた」という感情が多くの児童に共通しており、未知の体験に対する期待と不安が交錯している様子が窺えた。

③ どのようなところが楽しきではなかつたのか。

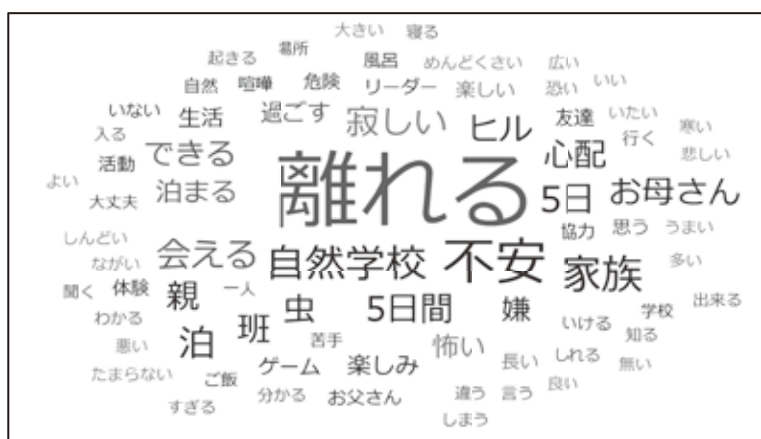


図5 自由記述から抽出されたキーワード (3(2)イ③)

「あまり楽しみではなかった」「楽しみではなかった」と回答した児童に聞いたところ、図5から分かるとおり、「家族」と「離れる」ことや、「普段の生活」から「離れる」ことに対する不安を感じ取ることができる。実際の記述からは、「家族と離れるのが嫌だった」「家族に会えないのが寂しい」、特に「親と離れるのが初めてだったから不安だった」という記述が多い。また、「ゲームができない」「スマホが触れない」といった、普段は自由にして良いことを制限されることに対する不満や不安が窺えた。他には、「ヒルやクマに会うかもしれない」「虫が多いのが嫌」特に「危険な生き物がいると聞いたから不安だった」など、自然環境への恐れを抱いており、身の回りに居ない生き物に不安を抱いていることが分かる。

「友達と一緒に過ごすことが不安」「仲の良い友達と班が分かれたことが嫌だった」のように、他者との関係性に対する不安を記述する児童もいたが、少数であり友達に関する不安が意外と少なかった。

### (3) 自然学校の前は、不安な気持ちはありましたか。

#### ア 質問の目的

不安を抱く児童がいることは想像に難くないが、その不安を抱かせる要因を具体的に探る。

#### イ 調査結果

##### ① 自然学校に行く前は、不安な気持ちはありましたか。

「不安ではなかった」「あまり不安ではなかった」「少し不安だった」「不安だった」の4項目で問うと、表3及び図6のとおりとなった。

表3 自然学校の前は、不安な気持ちはあったか

不安ではなかった	あまり不安ではなかった	少し不安だった	不安だった
1,118	534	1,860	534

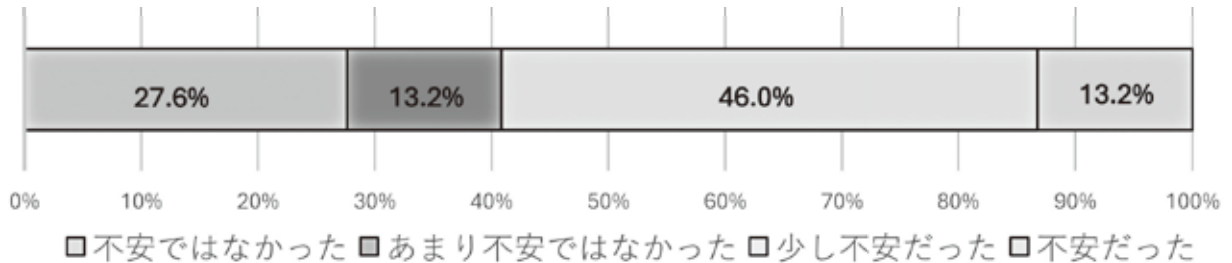


図6 自然学校の前は、不安な気持ちはあったか

「少し不安だった」「不安だった」と、大小問わなければ不安を抱いている児童が59.2%いることが表3及び図6から分かる。

##### ② どのようなことが不安でしたか。(自由記述より)

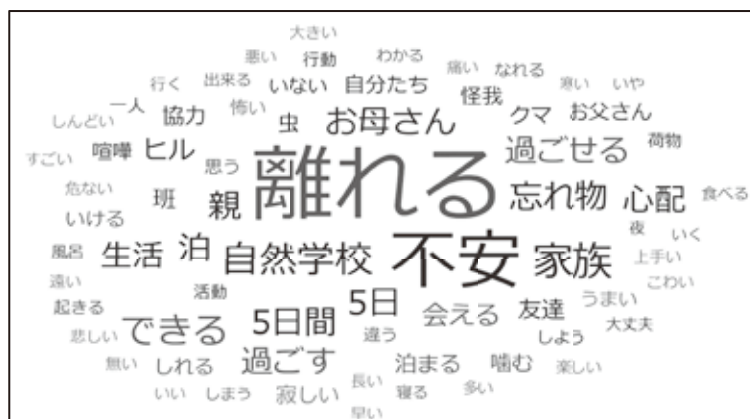


図7 自由記述から抽出されたキーワード (3(3)イ②)

「家族と離れること」「親がいないこと」に対する不安が強いことが図 7 から見て取れる。具体的には「お母さんと離れるのが心配だった」「家族と 4 泊 5 日も離れる不安」といった表現が多かった。

③ どうして不安ではなかったのですか。(自由記述より)

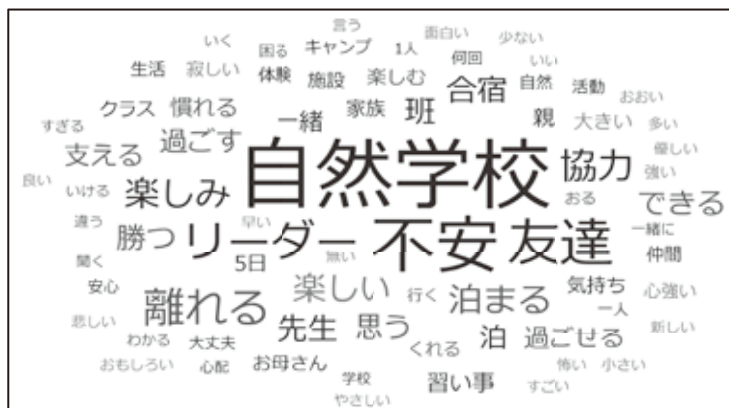


図 8 自由記述から抽出されたキーワード (3(3)イ③)

自然学校への参加に対する児童の感情として、「不安」という言葉をたくさん使っていることが図 8 から分かるが、実際の記述には、「友達がいるから不安ではなかった」と多くの児童が述べており、友達と一緒にいることで安心感を得ていることが窺えた。

自然学校に行く前について、「楽しかったかどうか」「不安な気持ちがあったか」の 2 つの質問について、結果をクロス集計したところ表 5 のとおりとなった。

表 5 楽しかったかどうか、不安な気持ちがあったかのクロス集計

		自然学校に行く前は、不安な気持ちはあったか							
		不安ではなかった		不安だった					
楽 自 然 学 校 に 行 く 前 は、	楽しみだった	993	24.5%	406	10.0%	1184	29.3%	206	5.1%
	少し楽しみだった	75	1.9%	101	2.5%	475	11.7%	98	2.4%
	あまり楽しみではなかった	28	0.7%	25	0.6%	174	4.3%	117	2.9%
	楽しみではなかった	22	0.5%	2	0.0%	27	0.7%	113	2.8%

両方の問いで自然学校に対してポジティブに回答した児童は全体の 38.9% (左上の色付き部分) であり、ネガティブな回答をした児童は 10.7% (右下の色付き部分) となっている。また、楽しみではあるが同時に不安を抱いている児童が 48.5% (右上)、不安はないが楽しみでもない児童は 1.8% (左下) であることが分かる。

つまり、児童にとって楽しみだからといって不安がないわけではない。普段の生活ではできない未知の体験に対し約 9 割弱の児童が楽しみを抱いているが、(3)②の自由記述からは、「初めてのところで 4 泊 5 日するからお父さんお母さんと 4 日間会えなくなるから大丈夫かなど不安だった」というように、相反する気持ちがあるとともに、親にいつもしてもらっていることを自分一人ですることができるのかという、親への依存が窺える。

楽しみではない理由には、普段自由に行っていることの制限に対する不満が多くみられた。友達関係に関することが少なかったが、不安である理由には「友達と仲良くできるか」「友達と喧嘩しないか」と友人関係に不安を抱き、活動に対しても「自分たちで全部できるのか」「ちゃんとできるか」といった意見があった。

一方で、「キャンプなどいろいろしていた」「サッカークラブでの遠征」など、過去に長期宿泊や家族と離れての宿泊などを経験したことが自信になり、「みんなで協力したら大丈夫」「リーダー(指導補助員:以降「リーダー」)がいるから」など、他者の存在が期待感や大きな楽しみにつながり安心感を抱いているのではないかと考えることもできる。







(6) 4泊5日の間に、「帰りたい」と思ったことはありましたか。(全員)

最初に「帰りたい」と感じたのは何日目ですか。その時に「帰りたい」と思ったのはどうしてですか。気持ちは、自然学校の途中で変化はありましたか。変化をした場合はその理由を教えてください。(「あった」と回答した児童のみ)

「帰りたい」とは思わなかった理由を教えてください。(「なかった」と回答した児童のみ)

ア 質問の目的

普段の生活から離れて生活する自然学校の期間中において、帰りたいと感じることも想像に難くない。そこで、「帰りたい」と思った児童には、最初に感じたのはいつなのか。そして、その理由を問うだけではなく、その気持ちは途中で変化したのか。その変化の要因は何かを問うことで、「帰りたい」という気持ちを軽減させる要因を探る。また、「帰りたい」と思わなかった児童にも、その要因を探る。

イ 調査結果

① 4泊5日の間に、「帰りたい」と思ったことはありましたか。

「あった」「なかった」の2つの項目で問うと、表8及び図15の結果となった。

表8 4泊5日の間に、「帰りたい」と思ったことはあったか

なかった	あった
2,270	1,776

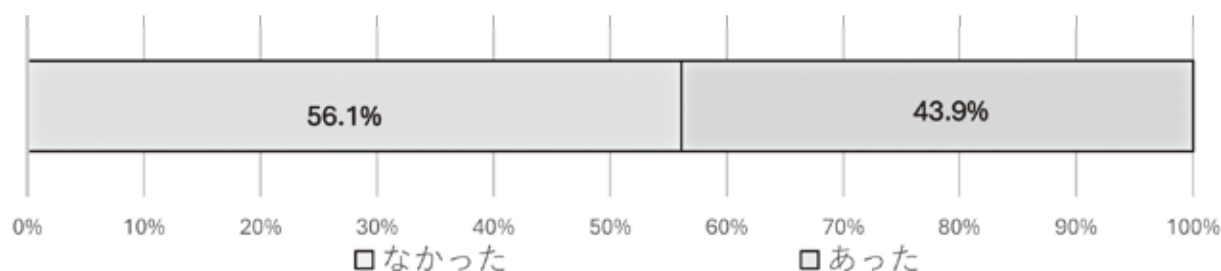


図15 4泊5日の間に、「帰りたい」と思ったことはあったか

表8及び図15から、4泊5日の間に「帰りたい」と思った児童は全体の43.9%であることが分かる。(5)イ①と同様に、(4)イ①では96.2%の児童が楽しかったと感じている中、全体の約4割の児童が「帰りたい」と思ったことがあることから、その気持ちを乗り越えたと考えることができる。

② あなたが、最初に「帰りたい」と感じたのは何日目ですか。

表9 最初に「帰りたい」と感じたのは何日目か

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
376	359	547	361	133

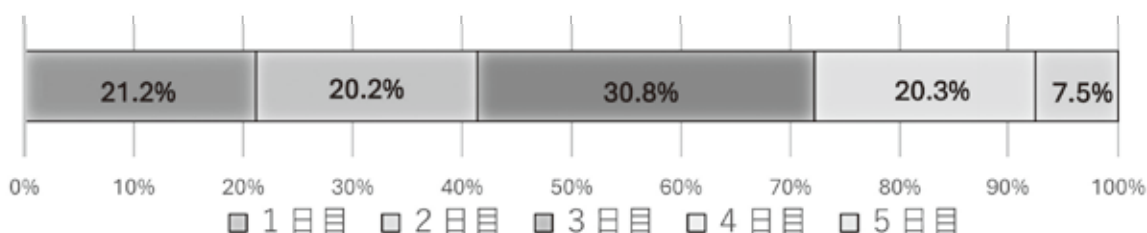


図16 最初に「帰りたい」と感じたのは何日目か







(8) 自然学校の期間中、自然について、「初めて知ったこと」がありましたか。

ア 質問の目的

自然について、改めて「初めて知った」ことを聞くことで、自然学校期間中の新たな発見があったかどうかを探る。

イ 調査結果

① 自然学校の期間中、自然について、「初めて知ったこと」がありましたか。

「あった」「少しあった」「あまりなかった」「なかった」の4項目で問うと、表12及び図23の結果となった。

表12 自然について、「初めて知ったこと」はあった

なかった	あまりなかった	少しあった	あった
446	1,231	616	1,753

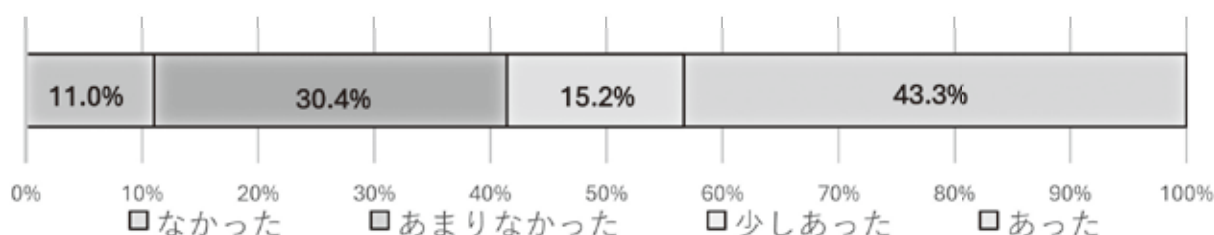


図23 自然について、「初めて知ったこと」はあったか

「あった」43.3%、「少しあった」15.2%と、合わせて58.5%の児童にとって、自然学校の期間中に「初めて知ったこと」があるということが表12及び図23より分かる。

② 初めて知ったことは、どんなことですか。

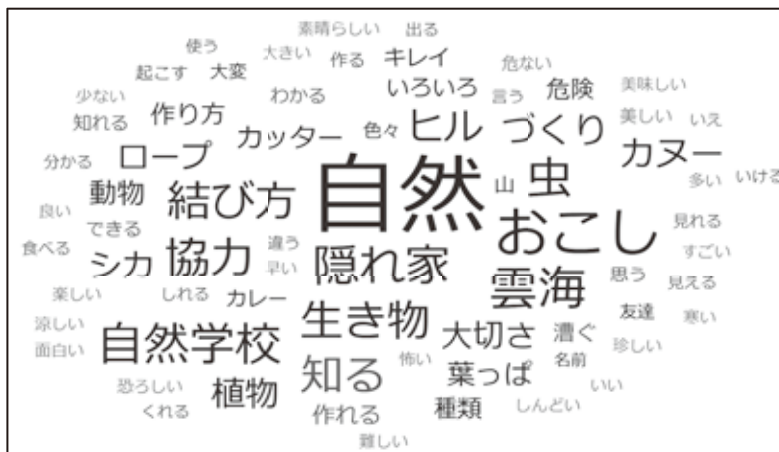


図24 自由記述から抽出されたキーワード (3(8)イ②)

自然については、「いろいろな生き物がいることを知りました」など、「虫の種類」「いろいろな植物」を知ることが、自然の多様性の理解につながったり、「自然の中で生活することの楽しさ」「自然には、貴重な生き物や初めて見るものがいっぱい」など、自然とのふれあいを通じて得た喜びや学びがあったりと、児童にとって多くのことを学び感じたことが窺える。その他、自然以外にも、「お母さんの大変さ」「自分たちでご飯をつくることの大変さ」から、体験の中で普段家族にしてもらっていることがいかに大変なことなのかを知ったことが窺えた。

「初めて知る」実体験が、自然の多様性への理解や学びに対しての影響を与えていると感ぜられる。

(9) 自然学校を通して、あなた自身が成長したと感じていますか。

ア 質問の目的

児童が自尊感情や自己肯定感を高めるには、何かを「できる」ようになるなどの実感をともなうことが重要であると考えます。そこで、教員やリーダーからの他者評価も大切だが、児童が自己をふり返り「成長した」と実感しているのか、またいつ実感したのかを探る。

イ 調査結果

① 自然学校を通して、あなた自身が成長したと感じていますか。

「感じている」「感じていない」の2つの項目で問うと、表 13 及び図 25 のような結果となった。

表 13 自身の成長を感じているか

感じていない	感じている
665	3,381

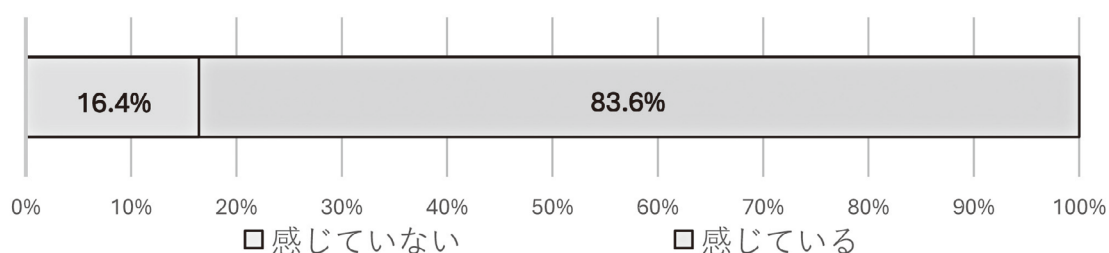


図 25 自身の成長を感じているか

表 13 及び図 25 から、83.6%の児童が自然学校を通して成長したと感じていることが分かる。4泊5日の自然学校は、児童にとって成長したという実感を伴う体験活動だったことが窺える。

② 何日目に一番成長したと感じましたか。

表 14 何日目に一番成長したと感じたか

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
161	462	943	1,002	813

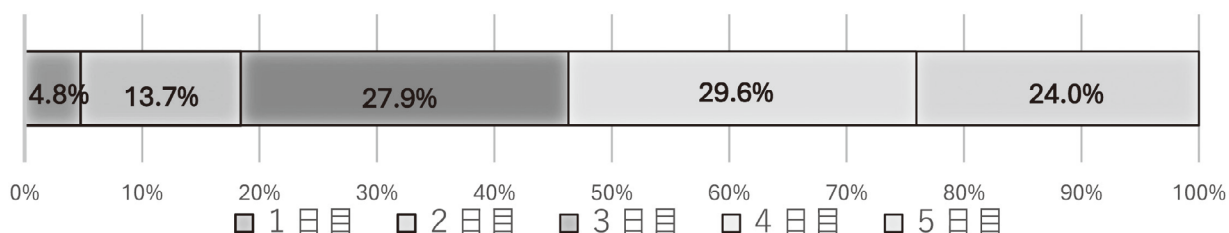


図 26 何日目に一番成長したと感じたか

3日目 27.9%、4日目 29.6%、5日目 24.0%と後半3日間に成長を実感している児童が多いことが表 14 及び図 26 から窺える。また、4日目と5日目を合わせると 53.6%となることから、2泊3日ではなく4泊5日の長期宿泊体験でなければ、約半数の児童は成長したと実感することができないことが窺える。

③ その日に成長を感じた理由を教えてください。

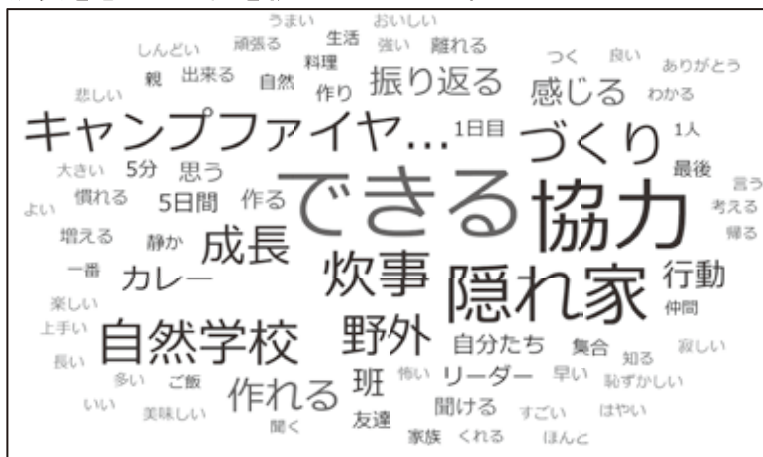


図 27 自由記述から抽出されたキーワード（3(9)イ③）

図 27 より、「協力」「できる」という言葉が頻出していることから、友達との協力の重要性和自立の実感により成長を感じたことが窺える。実際の記述には、班での活動を通じて協力できたことが印象に残ったと記述していた。また、「1人でできることが増えた」などの表現が多く、自然学校前に抱いていた不安を払拭し、自分のことを自分でできるようになったことを喜ぶ記述があり、自立を実感していたことが窺える。さらに、1日目と5日目の自分を比較し、「話の聞き方」「整列の早さ」など、具体的な例を挙げて「成長した」と感じていた子もいた。他には、野外炊事や漕艇体験、登山などの活動を通じて「新しいことを学んだ」という記述が多く、特に友達とのチームワークが必要な活動が充実していたことが窺える。

総じて、抽出されたキーワードに動詞が多く、「作る」ではなく「作れる」という表現から、児童が能動的に活動した結果であり、そのことが「できる」につながり、自尊感情や自己効力感を高めることにつながっているのではないかと考えられる。

(10) 自然学校の期間中、感動したことがありましたか。

ア 質問の目的

自然学校に関わる教員の視点から考えると、児童は特にキャンプファイヤーに感動していることは想像に難くないが、身近な自然、自己の成長などにも感動を覚えているのではないかと考える。そこで、改めて、児童には、自然学校を通じて感動があったのかどうか。また何に感動しているのかを探る。

イ 調査結果

① 自然学校の期間中、感動したことがありましたか。

「あった」「なかった」の2つの項目で問うと、表 15 及び図 28 の結果となった。

表 15 自然学校で感動したことはあった

なかった	あった
1,782	2,264

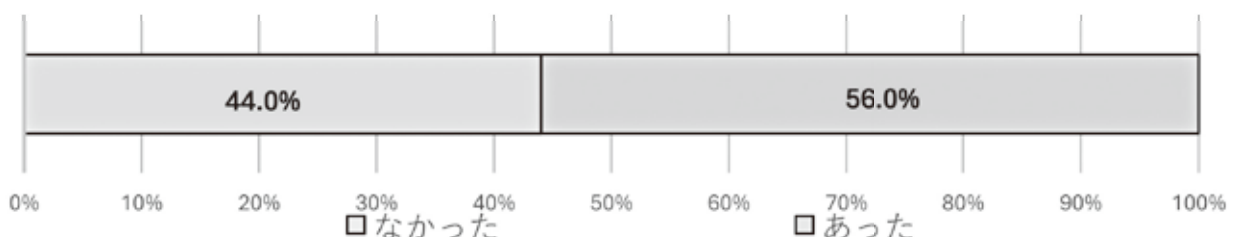


図 28 自然学校で感動したことはあったか

表 15 及び図 28 より、56.0%と約半数の児童が自然学校を通じて感動したことがあると感じていることが分かる。

② どのようなことに感動しましたか。

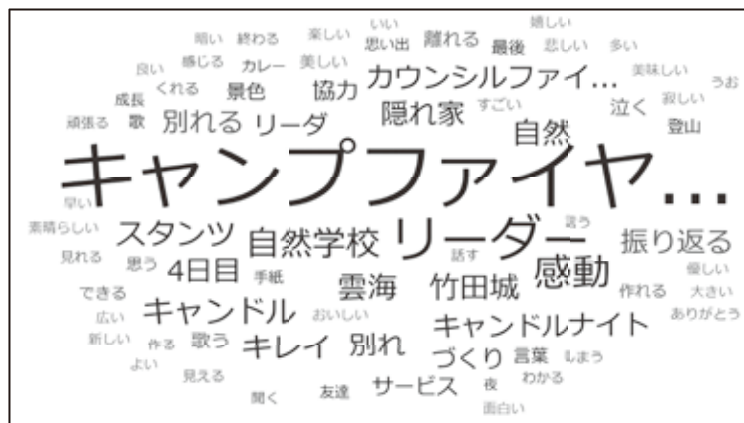


図 29 自由記述から抽出されたキーワード（3(10)イ②）

まず、図 29 を見ると「キャンプファイヤー」が目にとまる。児童が自然学校での体験をふり返った際、キャンプファイヤーでの思い出が一番印象強かったことが窺える。自由記述からは、キャンプファイヤーでの「リーダーの言葉」が心に強く残った。またリーダーの話聞くことで、一週間共に過ごした思い出が想起され、リーダーとの別れが近いことを実感し、その状況に感動したようだ。また、「自然ってこんなに美しいのか」と活動でふれた自然に対し感動を覚えたり、「お母さんがいなくても寝られたこと」や「みんなで協力してできた」ことなど、自分自身やクラスが成長したことに感動をしたりした様子が窺えた。

#### 4 総合考察

今回の調査では、児童が実際にどのように感じ、どのように捉えているのかを探るため、自由記述を多く取り入れた。

児童に自由記述を求めることは少しハードルが高いかもしれないと感じていたが、実際に調査を進めると、多くの児童が表現豊かに記述していた。

そこで、自然学校実施前後を比較して、以下の3つの視点で考察したい。

##### (1) 児童が思い描く「楽しみ」と抱える「不安」について

実施前に児童が感じているのはポジティブ感情だけではなく、楽しみだと思っている児童もネガティブ感情の不安を抱えていたことが分かった。

ネガティブ感情を抱く要因として共通していたのは、長期宿泊することで家族や普段の生活環境から「離れる」ことだった。また、楽しみではない理由としては少なかったが、不安な理由には友達との人間関係が含まれた。不安を軽減する要因として、経験の多寡と事前の良好な人間関係の構築を例に挙げたが、実際に自然学校を体験した児童の96.2%は楽しかったと感じていることから、ネガティブ感情のすべての要因を取り除かなければ自然学校に行くことができないわけではないことが分かる。当然、特別な支援が必要な児童には、指導者が個別に不安を解消するための対応をする必要はあるが、想像以上に児童には乗り越える力、楽しむ力があるのだと感じることができる。また、周りにいる友達やリーダーの存在が大きく、「協力して」取り組んだことや、一緒に「遊んだ」こと、普段できないことやいつもと違う体験が不安の解消につながったことが分かる。このことから、自然学校の中で、児童にどのように取り組ませるのか、リーダーにどう関わらせるのかを指導者が考え、実施することが重要であることも分かる。

##### (2) 実施期間中に感じた「つらさ」や「帰りたい」という感情について

「つらい」と感じることで「帰りたい」と思う要因として共通していることは、期間中に家族に会えないことで寂しさを感じることであった。実施前から抱えている不安がそのまま残っている状況である。また、「帰りたい」要因として「ゲームがしたい」など、普段自由にしていることへの

制限について実施中も引き続き要因として挙げられた。しかし他の要因を探ると、「つらい」は体調不良や階段の昇降などの体力的な要因だった。このような感情も、終わってみれば「楽しい」と感じており、自然学校での「楽しい」体験がネガティブな感情を解消させていることが分かるが、このことについても、友達の存在が大きく関与している。一人ではなく、仲間と共に過ごす自然学校での4泊5日という長期宿泊を伴う体験は、ネガティブな気持ちをポジティブな気持ちへ変える重要な体験活動であることが分かる。

### (3) 実体験が児童に影響を与えたと考えられるもの

これまでをふり返ると、自然学校という実体験が児童に影響を与えたと考えられるものは、次の4点だと考えられる。

1点目は、事前の不安は解消されることである。行く前に児童が抱く不安はほぼ自然学校の体験活動により解消されることが分かった。

2点目は、途中で抱くネガティブな感情も乗り越えることができることである。実施期間中に抱くネガティブな感情は、すべてが解消されるわけではないが、仲間やリーダーという他者の存在、また協力の重要性を実感することで乗り越えることができることが分かった。

3点目は、語彙力や表現力の向上である。体験後は具体的な生き物の名前が挙がることや感情表現が豊かになることが自由記述から分かった。

最後に、4泊5日の実施期間による体験が自己効力感を高めることである。4日目と5日目に成長を感じた児童は53.6%となっている。つまり、後半の2日間で成長を感じる児童が半数以上あることが分かる。言い換えると2泊3日では半数以下の児童しか成長を感じることができないのではないかと思える結果となった。

本県の兵庫型「体験教育」の柱の一つである自然学校推進事業（文献〔3〕）では、学習の場を豊かな自然の中に移すことを趣旨の中で謳っている。児童にとっては、学校での学習が終われば家に帰るという安心が待っているが、自然学校はそうではなく、ある意味逃げ場のない非日常が5日間続く環境での生活となる。その時間を教員、リーダー、友達と共に過ごすことで、支えてくれる他者の存在、必然的に生まれる仲間との協力、自分たちで解決することを経験することができるのではないだろうか。

また、本県は社会情勢の変化が激しい今だからこそ自然学校を重要な体験の機会（文献〔2〕）と捉えている。その中で、感動体験、チャレンジする体験、本物に触れる体験、他者と関わる体験、命の大切さにふれる体験を通して、やり抜く力、豊かな心、協調性、自立心、仲間との絆等を育むため体験教育の充実を求めている。今回の調査結果は、自然学校での体験が児童に影響を及ぼしていることが、本県が考える趣旨に合致していると考えられる。

#### 文献

- [1] 芦田直弥・佐藤貴康・伊原久美子・山下宏文・亀山秀郎. 「五感を使った自然にふれる体験活動」による児童の資質・能力への働きかけについて. 兵庫県立南但馬自然学校研究紀要, 第17, pp. 1-25, 2024.
- [2] 兵庫県教育委員会. 持続可能な自然学校の充実に向けて・・・兵庫県教育委員会. 2025
- [3] 兵庫県教育委員会. 令和7年度自然学校推進事業実施要項. 兵庫県教育委員会. 2025.

### 【R7】〇〇市立▽▽小学校\_児童用アンケート

南但馬自然学校に宿泊した自然学校に関するアンケートです。  
出席番号の○番の「番」は記入しないでください。  
回答は、一人1回です。

\* 必須

1. 何組ですか \*

- 1組  
 2組  
 3組  
 4組

2. 出席番号を書きましょう(数字のみ記入しましょう) \*

あなたの身の回りの環境について、あなた自身が感じていることを教えてください。

3. あなたが普段生活をしている場所（住んでいる家の周りや通っている学校の周り）は自然豊かな場所だと思いますか。\*

- 思う  
 やや思う  
 あまり思わない  
 思わない

4. あなたにとって、「自然」とは何ですか。\*

自然学校をふりかえって、あなたの気持ちや感じたことを教えてください。

5. 自然学校に行く前は、楽しみでしたか。\*

- 楽しみだった  
 少し楽しみだった  
 あまり楽しみではなかった  
 楽しみではなかった

6. 「楽しみだった」「少し楽しみだった」と答えた人に聞きます。どんなところが楽しみでしたか。自由に書いてください。\*

7. 「あまり楽しみではなかった」「楽しみではなかった」人に聞きます。どんなところが楽しみではなかったのですか。自由に書いてください。\*

8. 自然学校の前は、不安な気持ちはありましたか。\*

- 不安ではなかった  
 あまり不安ではなかった  
 少し不安だった  
 不安だった

9. 「不安だった」「少し不安だった」人は、どのようなことが不安でしたか。理由を教えてください。\*

10. 「あまり不安ではなかった」「不安ではなかった」人は、どうして不安ではなかったのですか。理由を教えてください。\*

11. 自然学校は楽しかったですか。\*

- 楽しかった
- 少し楽しかった
- あまり楽しくなかった
- 楽しくなかった

12. 「楽しかった」「少し楽しかった」と感じたのはなぜですか。理由を教えてください。\*

13. 「あまり楽しくなかった」「楽しくなかった」と感じたのは、なぜですか。理由を教えてください。\*

14. 自然学校の期間中、「つらい」と思うことはありませんでしたか。\*

- なかった
- あまりなかった
- 少しあった
- あった

15. 「つらい」ことが「あった」「少しあった」人に聞きます。何がつらかったのですか。\*

16. 4泊5日の間に、「帰りたい」と思ったことはありませんでしたか。\*

- あった
- なかった

17. あなたが、最初に「帰りたい」と感じたのは何日目ですか。\*

- 1日目
- 2日目
- 3日目
- 4日目
- 5日目

18. その時に、「帰りたい」と思ったのはどうしてですか。理由を教えてください。\*

19. 「帰りたい」という気持ちは、自然学校の途中で変化はありましたか。例)途中で帰りたくなかった など\*

- 変化があった
- 変化はなかった

20. 「帰りたい」という気持ちが自然学校の途中で変化したのはなぜですか。その理由を教えてください。\*

21. 「帰りたい」とは思わなかった理由を教えてください。\*

22. 自然学校の期間中、「自然」を感じましたか。\*

- 感じた
- 少し感じた
- あまり感じなかった
- 感じなかった

23. 自然学校の期間中で感じた「自然」とは、どんなことですか。\*

24. 自然学校の期間中、自然について、「初めて知ったこと」がありましたか。\*

- あった
- 少しあった
- あまりなかった
- なかった

25. 「初めて知ったこと」とは、どんなことですか。\*

26. 自然学校を通して、あなた自身が成長したと感じていますか。\*

- 感じている
- 感じていない

27. 何日目に一番成長したと感じましたか。\*

- 1日目
- 2日目
- 3日目
- 4日目
- 5日目

28. その日に成長を感じた理由を教えてください。\*

29. 自然学校の期間中、感動したことがありましたか。\*

- あった
- なかった

30. どのようなことに感動しましたか。具体的に教えてください。\*

引率教員の自然学校への取組とふり返りに関する調査から、今後の自然学校を考える

The Current and Future :  
A survey of chaperon teachers' reflection on the nature school

佐藤貴康<sup>1</sup>・西口元浩<sup>1</sup>・高見和至<sup>2</sup>・甲斐知彦<sup>3</sup>・足立延也<sup>4</sup>

<sup>1</sup>兵庫県立南但馬自然学校 <sup>2</sup>神戸大学大学院 <sup>3</sup>関西学院大学 <sup>4</sup>三田市立三田小学校

## 1 調査の目的

兵庫県が実施する「自然学校推進事業」は、本年度で 37 年目を迎えた。現在では、兵庫県が児童生徒の発達段階に応じて体系的に推進する、兵庫型「体験教育」の柱の一つとして実施している。

本校調査・研究委員会では、平成 30 年度に本校で自然学校の実施校より抽出した学校において、自然学校に参加した児童とその保護者を対象とした質問紙調査 [1]により、保護者、児童の自然学校に対する考えについて検討を行った。そして、第 17 号では引率する教員に焦点を当てた。ここでは、教員は自然学校について、児童の成長や変容、教員自身の成長についてどのように捉えているのか、どのようにすれば自然学校のプログラムがより充実するのか、どうすればもっと普通の教育に生かしていけるのか等について、教員に対する質問紙調査を実施することで明らかにすることを目的とし調査した。今回は、前回の調査内容について引き継ぎ調査する。そして、その結果の比較検討を含めて、今後の自然学校のあり方を考えるための一助となればと考えている。

## 2 調査方法

### (1) 調査対象

令和 7 年度県立南但馬自然学校で自然学校を実施した学校の特別支援学級担任を含む小学校及び義務教育学校 5 年生担任に質問紙調査を依頼し、回答があった 167 人を調査対象とした。

### (2) 調査内容

「令和 7 年度自然学校推進事業の充実に向けたアンケート」とし、勤務校で実施した自然学校に対する質問紙調査を行った。調査では、まず、教職年数など基本的なデータについて尋ねた。

(質問 1～5)

次に、「今回の自然学校を終えて、児童、学級に対して得られた効果についての質問」として、児童の変容について尋ねた。この質問項目では、例えば、「自分の力（自分たちの力）で解決できる場面の増加」があったかどうか 4 段階で回答を求めた後、「前の質問の理由となった原因となる取組やプログラムにおいて、「1（ややある）～3（かなりある）」については充実した内容を、「0（ない）を選択した場合には、反対に十分ではなかった内容を次のア～カからすべてお選びください。」として、原因となったプログラム内容を選択させた。同様に、5 つの質問を行っている。(質問 6～15)

続いて、「自然学校を経験した自身の変化」について、ア～クの項目より選択させている。

(質問 16)

さらに、「今後の自然学校の実施期間について」「自然学校の充実に向け、今後意識して取り組みたいと思われるものについて」選択肢より回答を選んだ後、理由や課題等を自由記述させている。(質問 17～22)

詳しくは、資料にアンケート全文を記載しているので、参照されたい。

### (3) 調査手順

年度当初の自然学校開始時期に、今年度本校を利用する全小学校等にアンケート依頼の文書を送付した。回答は、Web 上のフォームへの入力 (Microsoft Forms を使用) として収集した。回答期限は、自校の自然学校終了後 4 週間以内とした。

また、回答したデータにおいて、選択項目はデータを表に整理するとともにグラフ化し、自由記述項目に関してはテキストマイニングするため、記述内の使用ワードを揃えるクレンジングを実施した。

クレンジングについては以下のとおりである。

- 例) ・遊具、基地 → 隠れ家  
・野外炊飯、飯盒炊飯 → 野外炊事  
※同じ単語は平仮名もしくは漢字表記に統一  
・隠れ家作り → 隠れ家づくり  
※本校の活動名に統一

#### (4) テキストマイニングについて

##### ア 使用ソフト ・KH Coder

- ・ユーザーローカルテキストマイニングツール  
(<https://textmining.userlocal.jp/>)

##### イ 読み取り方

自由記述の中にどのような言葉がどの程度出てきたのかを概観するためにユーザーローカルテキストマイニングツールによる分析により図に示した。それにより、ある程度の単語の使用頻度と記述内容がイメージできる。そこから、より詳細に分析をするため、前処理を行ったうえでKH Coder (文献[1])を使用した。その結果を示したものが、頻出単語 TOP 5 というかたちで表となっている。自由記述の中で出現頻度が高いワードに客観性を持たせるため、表にある数値を利用して考察した。

### 3 結果及び考察

#### (1) 調査対象

令和7年度に本校を利用した学校 92 校の教員 167 人

#### (2) 回答者年齢

表 1 回答者年齢

年代	回答数 (人)	比率 (%)
20代	41	24.6%
30代	70	41.9%
40代	36	21.6%
50代	17	10.2%
60代	3	1.8%

#### (3) 教職年数

表 2 教職年数

年数	回答数 (人)	比率 (%)
10年未満	77	46.1%
10年以上20年未満	57	34.1%
20年以上30年未満	21	12.6%
30年以上	12	7.2%

#### (4) 5年生担任としての自然学校の引率回数

表 3 5年生担任としての引率回数

回数	回答数 (人)	比率 (%)
5回未満	134	80.2%
5回以上10回未満	28	16.8%
10回以上15回未満	5	3.0%
15回以上	0	0.0%

(5) 担任について

表 4 担任学級の種別

学級	回答数（人）	比率（％）
通常学級の担任	133	79.6%
特別支援学級の担任	34	20.4%

(6) 勤務校の5年生は単学級か複数学級か

表 5 勤務校での学級編成

学級	回答数（人）	比率（％）
単学級	54	32.3%
複数学級	113	67.7%

(7) 勤務校の自然学校実施形態

表 6 自然学校の実施形態

実施方法	回答数（人）	比率（％）
単独（自校のみ）	80	47.9%
連合（複数校）	87	52.1%

(8) 自然学校を通して、次のプログラムをどの程度実施することができましたか。

ア 失敗体験を成功体験につないでいく取組やプログラム

表 7 失敗体験を成功体験につないでいく取組やプログラム（人）

できなかった	あまりできなかった	ややできた	できた
1	23	65	78

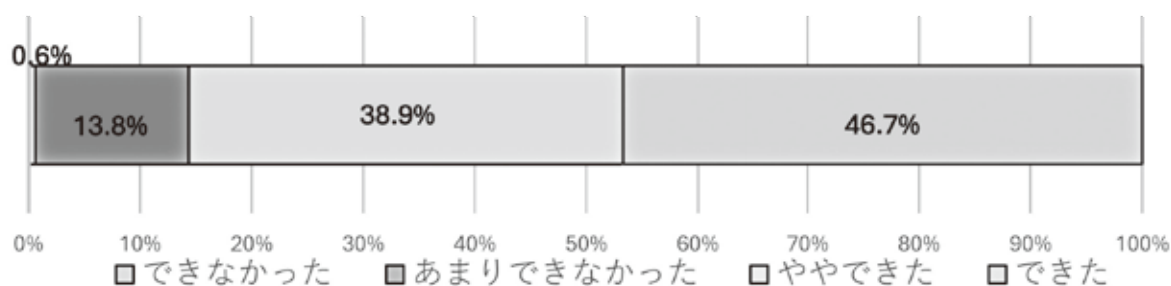


図 1 失敗体験を成功体験につないでいく取組やプログラム

表 7 及び図 1 より、85.6%の割合で失敗体験を成功体験につなげる取組やプログラムを実施することができたと回答している。

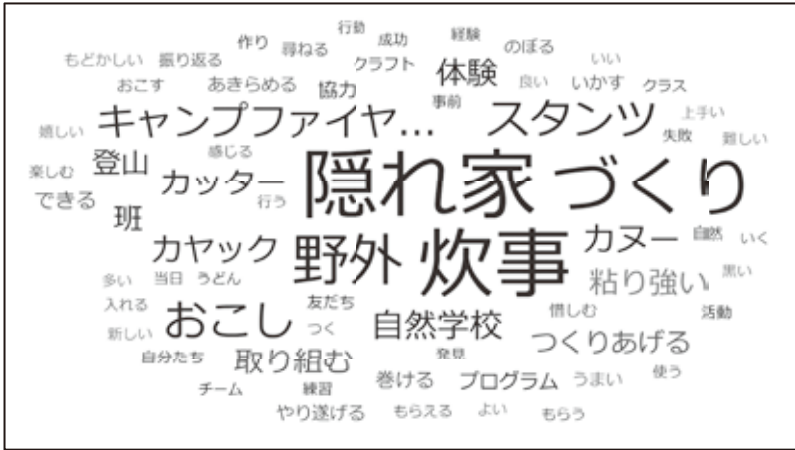


図2 自由記述から抽出されたキーワード ((8)ーア)

表8 頻出単語 TOP 5 ((8)ーア)

単語	出現回数
隠れ家づくり	45
野外炊事	43
火おこし	18
キャンプファイヤー	11
カッター	11

図2及び表8より、隠れ家づくり(45)と野外炊事(43)の出現頻度が高いことが分かる。ついで火おこし(18)が多く、キャンプファイヤー(11)やカッター(11)の順となっている。また、キャンプファイヤーで実施するスタンツやその練習、カッター・カヌー体験なども使用頻度が高いことが分かる。

このことから、粘り強く取り組むこと、協力して取り組むこと、共に創りあげ本番で成功を収めることなど、活動を通じて「挑戦」することや失敗を「乗り越える」ことの重要性を学び、役割分担や試行錯誤しながら成長する機会を得たことが窺える。



図3 隠れ家づくりの様子【明石市立朝霧小学校】

「隠れ家づくり」は、図3のとおり、自然の中で生育している木の幹を利用し、1日かけて丸太をロープで縛りつけ、児童がイメージするオリジナルの隠れ家を創る活動である。

指導者は、児童に必ずヘルメットと軍手を着用させ安全管理をする必要がある。

児童は、斜面での作業であり、時には高所での作業となるため、集中力を要する。また2mと3mの丸太の使い分けや試行錯誤しながら何度も繰り返しロープを縛る根気も必要となる。当然一人ではできないため、必然的に役割分担や協力が生まれる。

## イ 困難を乗り越える取組やプログラム

表9 困難を乗り越える取組やプログラム (人)

できなかった	あまりできなかった	ややできた	できた
0	25	54	88

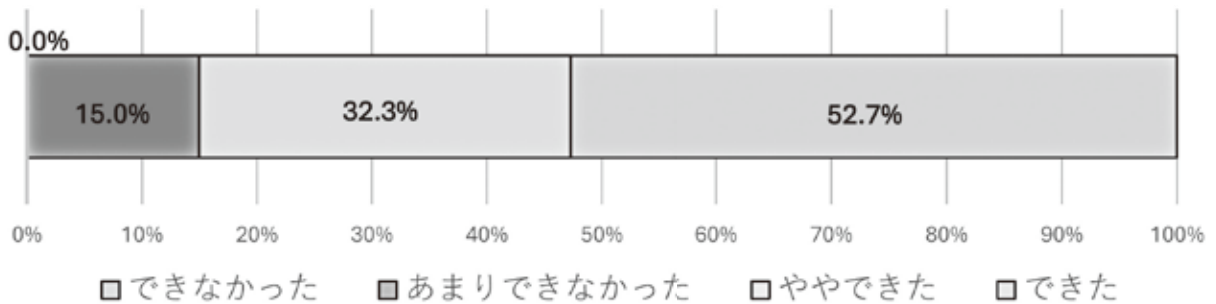


図4 困難を乗り越える取組やプログラム

表9及び図4より、85.0%の割合で、困難を乗り越える取組やプログラムを実施することができたと回答している。

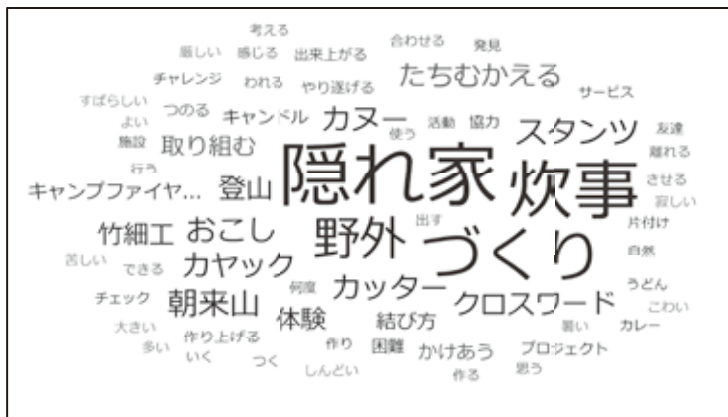


表10 頻出単語 TOP 5 ((8)ーイ)

単語	出現回数
隠れ家づくり	41
野外炊事	40
登山	16
カッター体験	13
協力	10

図5 自由記述から抽出されたキーワード ((8)ーイ)

図5及び表10より、隠れ家づくり(41)や野外炊事(40)が多く、必然的に協力(10)が生まれ、児童が活動を能動的に取り組む様子を捉えていることが窺えた。また朝来山登山(16)やカッター(13)・カヌー体験など、粘り強く最後までやり抜くことが求められる取組の回答が多かった。

実際の記述には、「隠れ家づくりでは、友達と協力しないと完成できなかったもので、力を合わせて取り組む体験や協力することで達成できる体験ができたように思う」があり、活動の過程を見取り、協力の重要性を感じている。また「集中力が切れそうになりながらもどンドン形が出来上がるにつれて、自分たちで声掛けしながら困難に立ち向かっていた」「体力がなくなって困難にぶつかった時にどうするかを考えさせることができた」という記述からは、何日目に実施するかにもよるが、疲れがたまり体力的に苦しくなる時であっても、児童に考える機会を与え、児童同士で解決させることが大切だと感じており、さらに「親元を離れ、寂しいと感じながらもその状況を受け入れ、身辺整理などを自分でする経験は大きいと感じた」という記述からは、集団生活の経験が寂しさを感じながらも自立心を育むことへつながると感じていることが窺えた。

## エ 感動体験が得られる取組やプログラム

表11 感動体験が得られる取組やプログラム (人)

できなかつた	あまりできなかつた	ややできた	できた
0	19	42	106

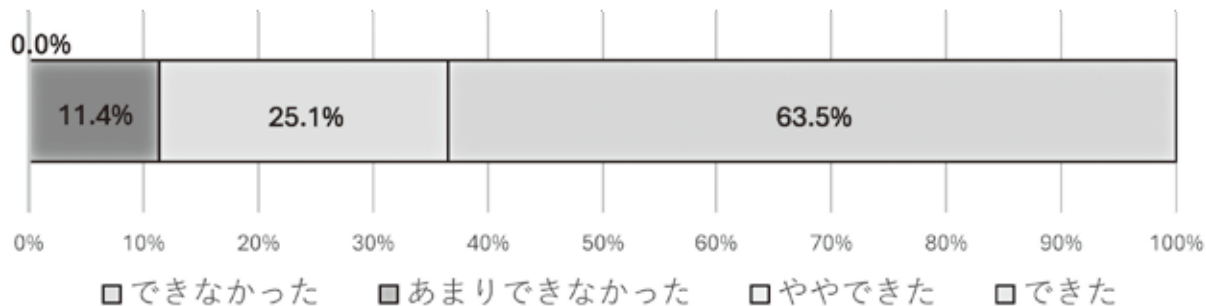


図 6 感動体験が得られる取組やプログラム

表 11 及び図 6 より、88.6%の割合で取り組むことができたと回答している。

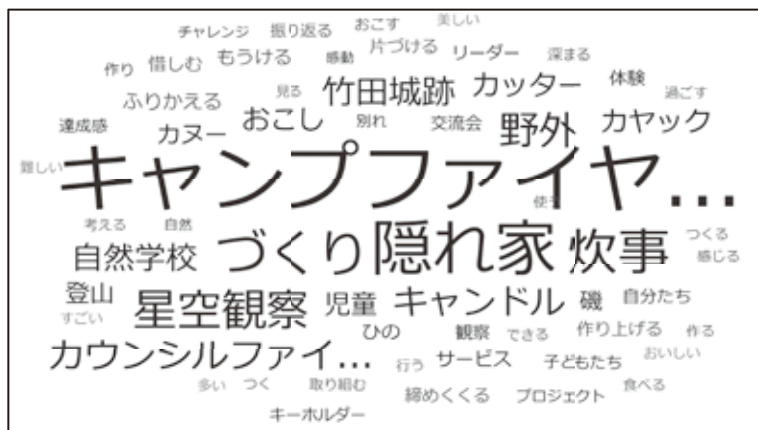


図 7 自由記述から抽出されたキーワード ((8)ーエ)

表 12 頻出単語 TOP 5 ((8)ーエ)

単語	出現回数
キャンプファイヤー	35
隠れ家づくり	29
野外炊事	22
キャンドルサービス	11
登山	9

図 7 及び表 12 からは、キャンプファイヤー (35)、キャンドルサービス (11)、ランクインはないがカウンスルファイヤーなどのふり返りの場、隠れ家づくり (29) や野外炊事 (22)、登山 (9) など、達成感や成就感を味わう場面、星空観察 (8) などの自然の美しさや不思議さが体験できる場の設定ができたことが窺える。

キャンプファイヤーなどのふり返りは、主に最終日前夜に実施することが多く、1 週間をふり返り、友達と共に過ごしてきたことで絆の強さを児童が実感することができる。隠れ家づくりや野外炊事などでは、協力して作業を行い、「できた」という成功体験を味わい達成感を得ている。星空観察では、自然とのふれあいをもとにした体験から感動を覚えたようである。

これまでの(8)ア「失敗体験を成功体験につないでいく取組やプログラム」及び(8)イ「困難を乗り越える取組やプログラム」と(8)エ「感動体験が得られる取組やプログラム」を比較すると、次のようなことが考えられる。具体的な取組やプログラムにおいて、いずれも隠れ家づくりや野外炊事が出現回数で上位となっている。各考察でも述べたが、失敗体験を成功体験につなげ、困難を乗り越えるには、自分たちが主体的に考え、協力して取り組むことが重要だと考える。

活動の過程での達成感や成就感がそのまま感動につながることも考えられる。一方で、このような経験を経て、非日常となるキャンプファイヤーなどの場で共に経験してきた仲間とふり返りを共有することで絆が深まり、それまで支えてくれたリーダー (指導補助員：以降「リーダー」) の存在を実感することが、より子どもたちの感動につながっているのだと考える。このことは、ふり返りが進むにつれ、友達やリーダーに向け涙を流しながら自分の言葉で思いを伝える姿からも窺えるのではないかと考える。

### ウ グループ活動を取り入れた取組やプログラム

表 13 グループ活動を取り入れた取組やプログラム (人)

できなかった	あまりできなかった	ややできた	できた
0	3	24	140









ウ 学級全体のまとめり、雰囲気向上

表 23 学級全体のまとめり、雰囲気向上 (人)

ない	あまりない	ややある	ある
0	27	74	66

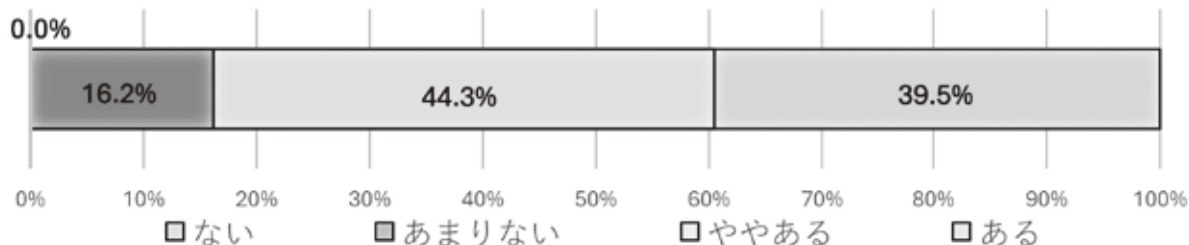


図 18 学級全体のまとめり、雰囲気向上

表 23、図 18 より、83.8%が学級内で効果があると回答しており、自然学校における体験活動を通じて、学級のまとめりや雰囲気向上が見られたことが分かる。

「ある」「ややある」の回答における、影響を与えた取組やプログラムについて自由記述させた結果をテキストマイニングしたところ図 19 及び表 24 のような結果を得た。

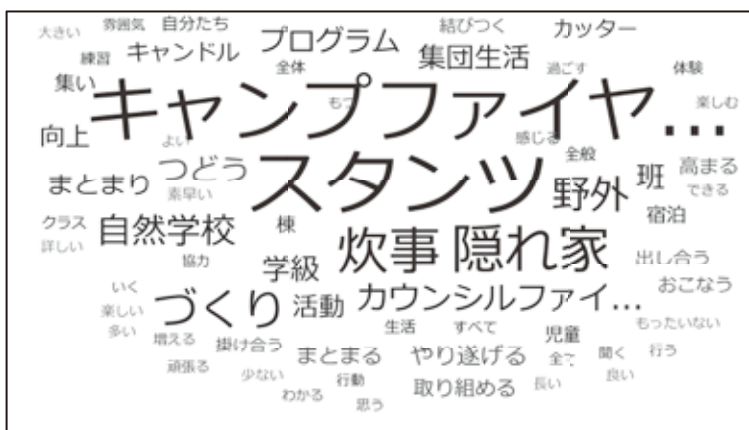


表 24 頻出単語 TOP 5 ((9)ーウ)

単語	出現回数
キャンプファイヤー	30
隠れ家づくり	23
野外炊事	21
活動	20
スタンツ	18

図 19 自由記述から抽出されたキーワード ((9)ーウ)

図 19 及び表 24 より、キャンプファイヤー (30)、隠れ家づくり (23) 及び野外炊事 (21) が多く、協力を要するプログラムのほか、集団生活の中での規範意識の醸成、クラス会議での意見交換などが、クラスの雰囲気を向上させる要因となったことが窺える。

「活動 (20)」は、班活動やグループ活動、係の活動などの記述が多かったためであり、「スタンツ (18)」はキャンプファイヤーに向けてのスタンツ練習という記述が多いことによる。

さらに、共に生活することで、共感したり共通の話題が増えたりし、コミュニケーションが活性化されたことが集団としてのまとめりができた要因となったことが窺えた。ただ、成果を実感する一方で、「目標に向かってみんなで進んでいく勢いはついたが、それが日常生活に結びつくかという、すぐ変わるわけではなく、自然学校の楽しい気分がしばらく抜けなかった」という記述のとおり、非日常の中で成し得たことをどのように普段の学校生活へつなげるのかということに課題を感じていることも窺えた。

エ 自然に対する興味関心の向上

表 25 自然に対する興味関心の向上 (人)

ない	あまりない	ややある	ある
2	44	70	51

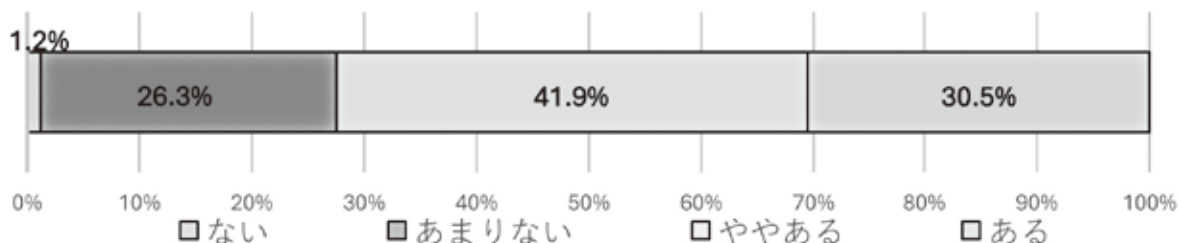


図 20 自然に対する興味関心の向上

表 25 及び図 20 より「ある」「ややある」と回答した割合が他の質問項目よりも低いものの、効果があると評価した割合が 72.4%と、高い結果を示した。

影響を与えた取組やプログラムについて自由記述させた結果をテキストマイニングにしたところ図 21 及び表 26 のような結果を得た。

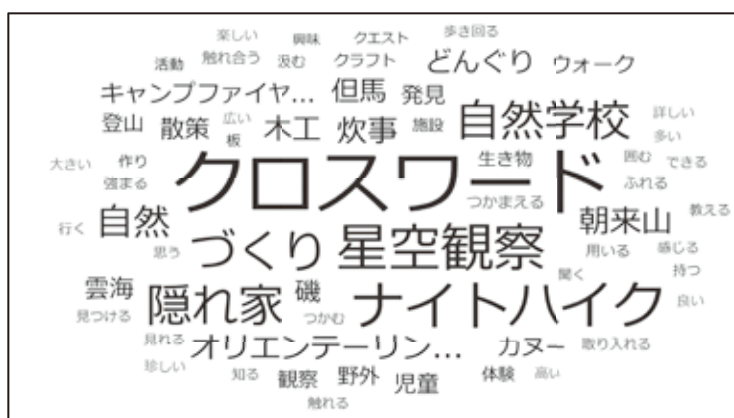


表 26 頻出単語 TOP 5 ((9)ーエ)

単語	出現回数
自然	20
自然発見！クロスワード	14
隠れ家づくり	13
体験	10
登山	8

図 21 自由記述から抽出されたキーワード ((9)ーエ)

図 21 及び表 26 より、自然発見！クロスワード (14) や朝来山登山 (8) などの施設内散策プログラム、星空観察やナイトハイクなど、自然 (20) にふれる機会を持ち、昼と夜の景色の違いを味わう体験 (10)、シカなどの野生の生き物との出会いや霧に包まれた生活棟での生活、雲海を実際に見る体験が児童の自然に対する興味関心を向上させていることが窺える。また、自然の中で実施する隠れ家づくり (13) を通して自然を感じるなど、活動内容の多様性も自然への興味関心を高めることにつながったと考えられる。



図 22 生活棟玄関前にいるシカ (6月)



図 23 生活棟から見える雲海 (12月)

### オ 教員と児童との良好な関係性の深まり

表 27 教員と児童との良好な関係性の深まり (人)

回答	人数
ない	1
あまりない	27
ややある	74
ある	65

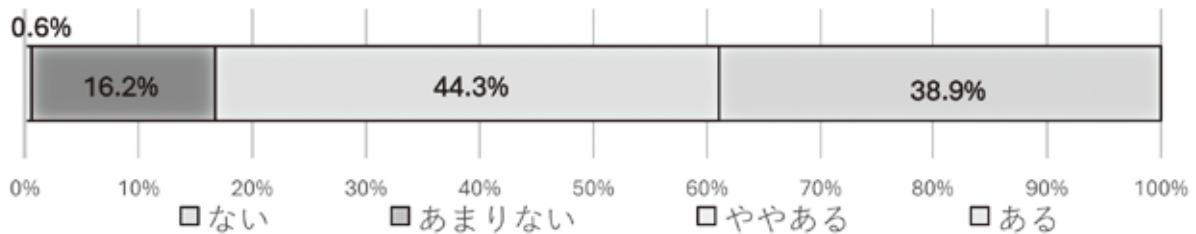


図 24 教員と児童との良好な関係性の深まり

表 27、図 24 より、「ややある」44.3%を占めるものの、全体として 83.2%の割合で効果があったと回答している。

影響を与えた取組やプログラムについて自由記述させた結果をテキストマイニングしたところ図 25 及び表 28 のような結果を得た。

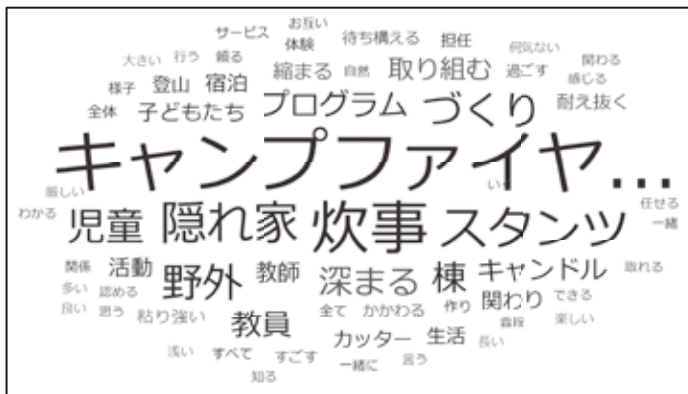


表 28 頻出単語 TOP 5 ((9)ーオ)

単語	出現回数
生活	26
キャンプファイヤー	20
野外炊事	18
活動	17
一緒	15

図 25 自由記述から抽出されたキーワード ((9)ーオ)

図 25 及び表 28 より、教員も児童と寝食を共にした生活 (26) をし、児童が協力したりやり抜いたりする場面を見ることで、児童の内面を知り新たな一面を発見することができたこと、担任であるなしに関わらず、児童同士のトラブルに対応したとき、じっくりと本音を聞く機会があったこと等が、児童にとっても教員が身近で頼れる大人としての存在感が強まったと感じられ、関係性を深める要因となったと窺える。また、教員がキャンプファイヤー (20) や野外炊事 (18) などの活動 (17) を児童と一緒に (15) に行ったことも良好な関係性の深まりにつながったと推察されるが、これらの活動は(8)エにおける「感動を得られる取組やプログラム」でも多かった。つまり、児童にとって感動を伴う活動、非日常的な時間を教員と共有することにより、良好な関係が深まったのではないかと考えられる。

(10) 今年度の自然学校を経験した教員自身の変化

表 29 今年度の自然学校を経験した教員自身の変化 (人)

自然学校を経験した自身の変化	ない	あまりない	ややある	ある
ア 児童についての新たな発見	1	3	80	83
イ 児童の実態に応じた実践的指導力の向上	1	24	112	30
ウ 児童理解の深化を生かした学級経営の充実	2	16	108	41
エ 職場内でのコミュニケーションの良化	6	23	83	55
オ 教員としてのやりがいの実感	8	22	82	55
カ 学校行事を企画、運営していく力の向上	5	19	104	39
キ 保護者とのコミュニケーション力の向上	5	39	91	32

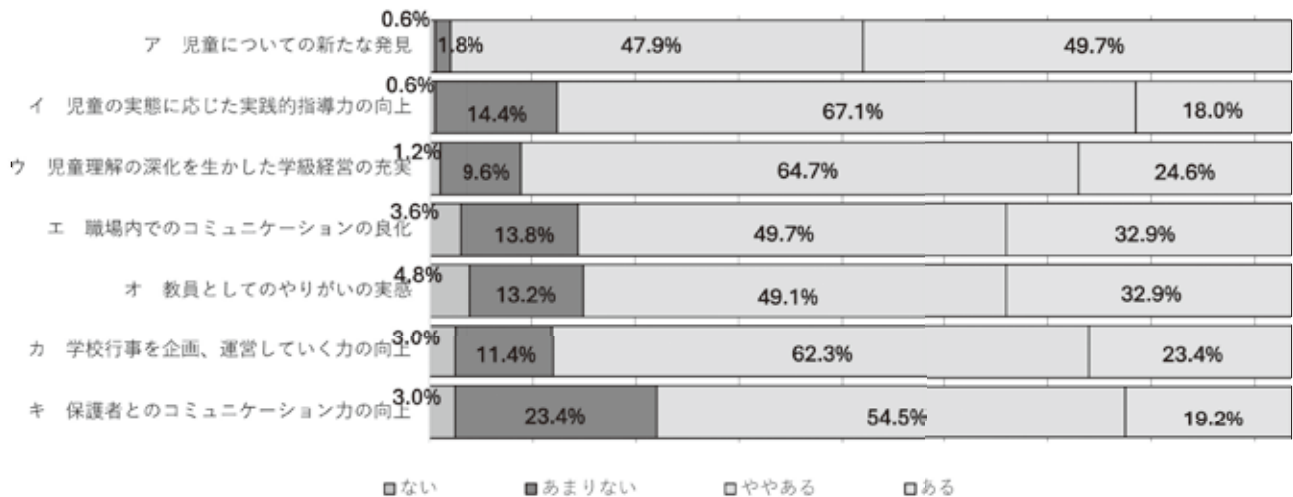


図 26 今年度の自然学校を経験した教員自身の変化

表 29、図 26 より、7 項目中 6 項目で 80.0%以上の割合で肯定的な評価をしていることが分かる。特に「ア 児童についての新たな発見」については、97.6%であり、4泊5日の間に普段の学校生活では見ることができない児童の新たな一面を発見することができ、児童理解へつながっていることが窺える。一方で、「オ 教員としてのやりがいの実感」については肯定的な回答が 82.0%と低かったが、それでも 80.0%を超えていることから高水準であると言える。児童との関係づくりだけでなく、自身の資質向上においても自然学校が大きく影響していることが分かる。

「キ 保護者とのコミュニケーションの向上」については、肯定的な回答が 73.7%と、唯一 70%台だが、自然学校における事前説明やアレルギー対応等での相談などの機会の中で、一定の力を向上させていることが窺える。

以上のことから教員の資質・能力の向上に、自然学校が大きく関わっていることが示唆されている。

### (1) ねらいの達成、児童の成長の観点から、適当だと考える実施期間について

表 30 適当だと考える実施期間（人）

実施期間	回答数	回答者比率
ア 日帰り（日帰り複数回を含む）	1	0.6%
イ 1泊2日	5	3.0%
ウ 2泊3日	67	40.1%
エ 3泊4日	19	11.4%
オ 4泊5日	72	43.1%
カ 5泊6日	3	1.8%
キ 6泊7日以上	0	0.0%

表 30 より、実施期間については、ねらいの達成及び児童の成長の観点から考え、従来どおりの 4泊5日が良いとした回答が多いが、同程度 2泊3日が良いと考えた回答もあった。

< 4泊5日が良いとした理由（自由記述より） >

多くのアクティビティを時間的にゆとりのあるプログラムとして組むことができる。友達とともに生活することで、友達とのトラブルがあっても、関係を修復するだけの機会と時間的余裕があり、その過程を通じて絆が深まり、相手を意識することで協調性が育まれる。また、家族と離れることで、甘える相手がいらないため、自立心や忍耐力を養うことができると理由を挙げている。

以上より、失敗を乗り越えるなど、時間や活動にゆとりある中で、社会性を育み自立を養う

といった児童の成長のためには、4泊5日が妥当であると考えている。

< 2泊3日が良いとした理由（自由記述より） >

まず教員の時間外勤務が多く、余裕を持った指導が難しいと感じている。また、児童にとって4泊5日は心理的負担が大きく、心の不安定さから体調を崩す児童もいる。教員、児童双方の負担から理由が述べられていた。

2泊3日であっても、内容を充実させることで児童の成長を促すことができると考え、さらに、2泊3日であれば担任が全日程で指導にあたることができ、一貫した指導を行うことができる。

その他、児童の体調や心の状態に合わせた支援ができ、安全面のリスク管理もしやすくなるを考える。

以上より、教員のみならず、児童の心理的・身体的負担を軽減し、教育的な目的をより効果的に達成するためには2泊3日が適していると考えている。

実施期間については、年代、経験年数、実施形態、学級種別、地区（教育事務所管内）でクロス集計をしたところ、次のとおりの結果となった。

### ① 年代別

表 31 年代別クロス集計

実施期間	年代	20代		30代		40代以上	
		回答数	回答者比率	回答数	回答者比率	回答数	回答者比率
ア	日帰り（日帰り複数回を含む）	0	0.0%	0	0.0%	1	1.8%
イ	1泊2日	1	2.4%	2	2.9%	2	3.6%
ウ	2泊3日	19	46.3%	25	35.7%	23	41.1%
エ	3泊4日	4	9.8%	9	12.9%	6	10.7%
オ	4泊5日	16	39.0%	33	47.1%	23	41.1%
カ	5泊6日	1	2.4%	1	1.4%	1	1.8%
キ	6泊7日以上	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

表 31 より、ウとオを比較したところ、20代ではウが7.3%、30代ではオが11.4%それぞれ上回り、40代以上では、同じ割合となった。

### ② 経験年数別

表 32 経験年数別クロス集計

実施期間	経験年数	10年未満		10年以上 20年未満		20年以上	
		回答数	回答者比率	回答数	回答者比率	回答数	回答者比率
ア	日帰り（日帰り複数回を含む）	0	0.0%	0	0.0%	1	3.0%
イ	1泊2日	2	2.6%	2	3.5%	1	3.0%
ウ	2泊3日	29	37.7%	24	42.1%	14	42.4%
エ	3泊4日	11	14.3%	5	8.8%	3	9.1%
オ	4泊5日	34	44.2%	24	42.1%	14	42.4%
カ	5泊6日	1	1.3%	2	3.5%	0	0.0%
キ	6泊7日以上	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

表 32 より、ウとオを比較したところ、差が見られたのは「10年未満」で、オがウより6.5%上回った。それ以外の経験年数では差は見られない。

年代と経験年数を合わせて考えてみる。採用された年齢によって、同じ年齢でも経験年数に差が生じていることが考えられ、表 31 では 20 代でウがオより 7.3%上回り、30 代ではオがウを 11.4%上回っているが、経験年数では「10 年未満」でオがウを 6.5%上回るだけで、10 年以上 20 年未満、20 年以上はともに同じ結果となった。

また、経験年数が 10 年未満の方の自由記述からは、2泊3日を選択した理由として、「3日目を過ぎてトラブルが増えた」「4日目、5日目となると子どもたちに疲労が見られた」など、児童間のトラブル等に対する対応が必要となったことが挙げられる。一方で4泊5日を選択した理由としては、「普段学校にいる時間すべてを離れた環境で過ごすことは貴重な体験」「普段関わることの少ない人のことを理解し、一緒に行動ができるようになるためには、日数が必要」「保護者と離れて何か経験するのに、一番適切」「家族の存在のありがたみを感じる子が多く、子ども同士の思いがぶつかったときに、自分たちで解決する時間を十分にとることができ、成長につながる」など、多くの体験や家族と離れること、自己解決などには時間が必要だと感じていることが分かる。

### ③ 実施形態別

表 33 実施形態別クロス集計

実施期間	実施形態	単独（自校のみ）		連合（複数校）	
		回答数	回答者比率	回答数	回答者比率
ア	日帰り（日帰り複数回を含む）	1	1.3%	0	0.0%
イ	1泊2日	3	3.8%	2	2.3%
ウ	2泊3日	29	36.3%	38	43.7%
エ	3泊4日	11	13.8%	8	9.2%
オ	4泊5日	34	42.5%	38	43.7%
カ	5泊6日	2	2.5%	1	1.1%
キ	6泊7日以上	0	0.0%	0	0.0%

表 33 より、ウとオを比較したところ、単独（自校のみ）での実施校ではウよりオが 6.2%上回っている。連合（複数校）での実施校では割合での差はない。

### ④ 学級種別

表 34 学級種別クロス集計

実施期間	学級種別	単学級		複数学級	
		回答数	回答者比率	回答数	回答者比率
ア	日帰り（日帰り複数回を含む）	0	0.0%	1	0.9%
イ	1泊2日	0	0.0%	5	4.4%
ウ	2泊3日	21	38.9%	46	40.7%
エ	3泊4日	7	13.0%	12	10.6%
オ	4泊5日	25	46.3%	47	41.6%
カ	5泊6日	1	1.9%	2	1.8%
キ	6泊7日以上	0	0.0%	0	0.0%

表 34 より、ウとオを比較したところ、単学級での実施校は 7.4%、複数学級での実施校は 0.9%、それぞれオがウを上回った。

以上より、差が表れたのは実施形態における単独（自校のみ）実施の 6.2%と学級種別による単学級の 7.4%だが、連合（複数校）実施や複数学級では、差は見られなかった。

連合（複数校）での実施では、児童の指導方法等学校間でのすり合わせが必要だったり、複数学級では、規模が大きくなるにつれ多様な児童に対する対応が増えたりすることから、ウとオの

差が埋まったのではないかと考える。

## ⑤ 地区別について

表 35 地区別クロス集計

実施期間	地区	阪神		播磨東		播磨西		但馬		丹波	
		回答数	回答者比率	回答数	回答者比率	回答数	回答者比率	回答数	回答者比率	回答数	回答者比率
ア	日帰り（日帰り複数回を含む）	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%	0	0.0%	0	0.0%
イ	1泊2日	2	4.4%	0	0.0%	3	5.7%	0	0.0%	0	0.0%
ウ	2泊3日	27	60.0%	11	28.2%	15	28.3%	2	18.2%	12	63.2%
エ	3泊4日	6	13.3%	5	12.8%	6	11.3%	1	9.1%	1	5.3%
オ	4泊5日	10	22.2%	21	53.8%	27	50.9%	8	72.7%	6	31.6%
カ	5泊6日	0	0.0%	2	5.1%	1	1.9%	0	0.0%	0	0.0%
キ	6泊7日以上	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

※淡路については利用校がないため表には入れていない。

### 【地区について】

阪神・・・尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、三田市、猪名川町  
 播磨東・・・明石市、加古川市、高砂市、稲美町、播磨町、西脇市、三木市、小野市、  
 加西市、加東市、多可町  
 播磨西・・・姫路市、市川町、福崎町、神河町、相生市、赤穂市、宍粟市、たつの市、  
 太子町、上郡町、佐用町  
 但馬・・・豊岡市、養父市、朝来市、香美町、新温泉町  
 丹波・・・丹波篠山市、丹波市

※地区には、行政区分を示すため、本校を利用していない市町も記載されています。

地区の割り振りは、上記となっている。本校を利用した学校を地区ごとに集計したものが表35である。

表35において、回答者比率でオからウの差を求めると、阪神▲37.8%（▲：「マイナス」以降同様）、播磨東25.6%、播磨西22.6%、但馬54.5%、丹波▲31.6%となり、今回の調査において、実施期間でウがオに迫ったことにつながる結果として唯一関連付けられると考える。

全体での自由記述から、(11)ーオと(11)ーウでそれぞれ考えられることをまとめたが、ここで、改めて阪神及び丹波の2地区において考察する。

2泊3日を選んだ教員（n=39）の自由記述には、3日目以降の児童の疲れや精神的ストレス、児童間に起きる大小のトラブルが挙げられた。また、担任が児童に関われるのは2泊3日のため、全日程で関われるという理由で選択した教員も多かった。他には、2泊3日でも活動を精査することで十分ねらいを達成することができること、4泊5日の意義も十分理解できるが、前半と後半で担任は交代を余儀なくされるために前半の担任は成長の瞬間を見ることができないといった意見があった。

一方で、4泊5日を選んだ教員（n=16）の自由記述には、「主体的に考え行動することはどうということなのか」を体験することをねらいとしていた等、その達成には4泊5日が必要だと感じたという意見があった。また、児童のふり返りに、3日目までは帰りたかったが4日目に変化が起きたこと、4日目に大きなケンカをした児童が、自力解決をし、5日目に深い友情関係を築いたこと、2日目の朝にできなかったことが日を追うごとにできるようになったと実感したことなどが書かれており、成長の観点から4泊5日を選択したとあった。さらに、3日目以降疲れを感じ、少し寂しくなってきたころに、友達やリーダー、教員と協力して乗り越えることに意義があると感じたことが記述されていた。

双方の記述からは、一部2泊3日でねらいが達成できるという意見はあるが、4泊5日で実施することの意義は感じていることが分かる。それ以上に3日目以降の児童の疲労からくる精神的に不安定な状態、体調不良などに対し、同様に疲れを感じている教員に対応を迫られることへの負担感が大きいことがこのような結果につながっているのではないかと考える。

その負担軽減のため、教員は連続して2泊3日しか引率できないようになっているが、その

引率期間中に児童の「活動」や「成長」を見届けたいという思いから、2泊3日を選択しているのではないかと考える。

(12) 自然学校において困ったことや苦心したことについて

ア 自然学校出発当日までの準備段階で、最も困ったこと、苦心したことを教えてください。

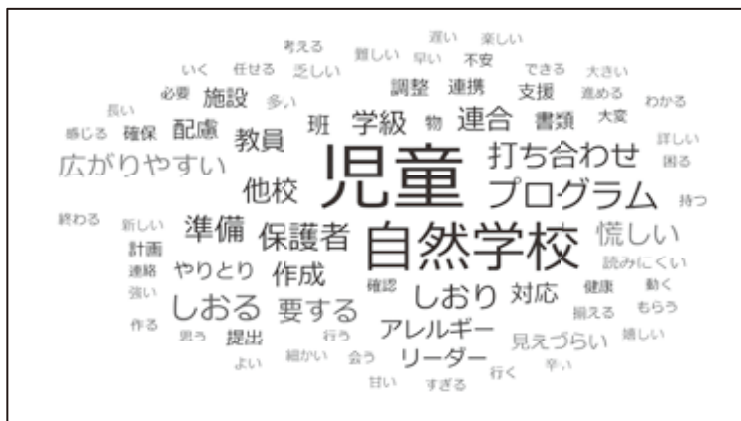


表 36 頻出単語 TOP 5 (12-A)

単語	出現回数
準備	47
児童	46
プログラム	21
自然学校	15
保護者	15

図 27 自由記述から抽出されたキーワード (12-A)

図 27 及び表 36 より、児童 (46) に関する困りごとが多いことが分かる。初めての環境、家族と離れること、初対面の仲間との活動など、児童が抱く不安を軽減させるための対策とその保護者 (15) へのコミュニケーションが必要となる。その対応や準備 (47) に追われているのではないかと考える。また、「アレルギー対応の必要な児童」について、本校との書類のやりとりが多いことも挙げられる。さらに、単独校であれば、同一週の利用校と、連合であれば、複数校での連携が必要となり、プログラム (21) や実施場所についての事前打合せや調整が大変である。

自然学校 (15) の準備とともに、通常業務があるため、業務過多になり、時間管理も難しい。加えて、時期によっては感染症対策にも注力せざるを得ない状況もあった。

その他、通常学級担任であれば、しおりづくりなどもあり、5日間の膨大な準備物を整えるとともに、その確認作業にも多くの時間を費やすことになる。協力体制がないわけではないだろうが、他の教員に依頼するにしても相手が理解するまで説明が必要となる。

特別支援学級担任であれば、担任する児童一人一人に合わせた事前指導がある。学年で作成したしおりに必要に応じてルビ打ちをし、該当児童の食事、入浴、服薬 (あれば) に対する教員の動き等の綿密な確認が必要となる。

以上のとおり、学年に在籍する児童に関わる教員には、準備の段階で多くの困りごとがあることが分かる。

イ 自然学校実施期間中に、最も困ったこと、苦心したことを教えてください。

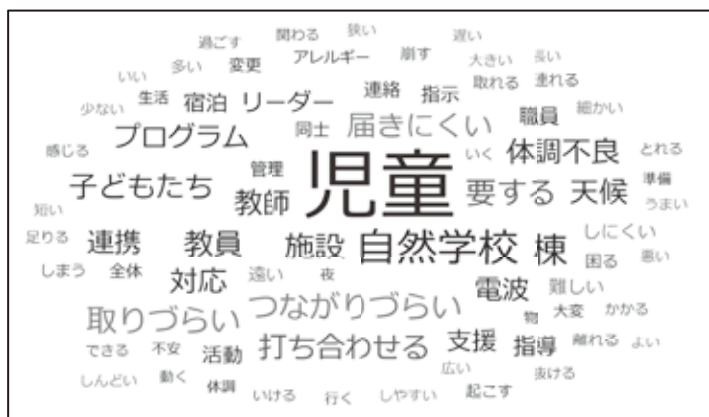


表 37 頻出単語 TOP 5 (12-B)

単語	出現回数
児童	55
対応	25
連絡	15
施設	12
体調不良	11

図 28 自由記述から抽出されたキーワード (12-B)



表 39 より、70.7%の教員が「ウ 学校では得難い体験活動」を重視していることが分かる。本校での実施期間中、普段の学校生活では体験できない自然体験活動を共に経験することで、改めて体験活動への魅力と意義について再認識したのと考えられる。

次いで、56.3%の教員が「エ 社会性や自立性を育むための集団活動」を意識している。アクティビティだけではなく、長期の宿泊や他者との共同生活において大切な規範意識等を育むことが自然学校を実施するうえで重要であることを考えているのではないかと推測される。

#### (15) 今後、研修してみたい具体的な内容

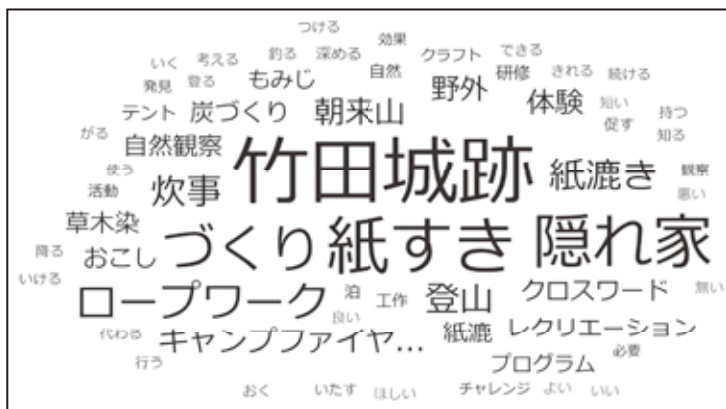


図 30 自由記述から抽出されたキーワード (15)

表 40 頻出単語 TOP 5 (15)

単語	出現回数
隠れ家づくり	16
竹田城跡登山	10
活動	7
紙すき体験	7
野外炊事	7

図 30 及び表 40 より、「隠れ家づくり」(16)における安全管理とロープワークなどの基礎知識、「野外炊事」(7)での火おこしや自然の中での料理、朝来山や竹田城跡への「登山」(10)、「紙すき体験」(7)「竹のスプーンづくり」などの「クラフト」が多かったことが分かる。その他、自然体験を取り入れた活動(7)の効果的な進め方等プログラムデザインに関する研修を希望している教員がいた。

## 4 総合考察

今回の調査では、自然学校を通してどの程度プログラムを実施できたかという質問に対し、「失敗体験を成功体験につなげる」「困難を乗り越える」「感動体験が得られる」ことのできる取組やプログラムなどについて、「ややできた」「できた」と肯定的に評価する取組やプログラムを自由記述にすることで、教員が考える具体的な活動がはっきりした。一方で、実施期間については、前回調査に比べ2泊3日が良いと考える教員の割合が、4泊5日に迫る結果となるなど、時代の流れによって教員の意識も変化していることも分かった。そこで、最後に以下の視点で総合的に考察し、(1)では、指導者から視る自然学校として、児童及び教員の方々の成長を考えたプログラムの提案、(2)では自然学校を実施する上での課題と解決策へ向けての提言、(3)についてはまとめとして今後の課題を記す。

### (1) 指導者から視る自然学校

3(8)エで述べたとおり、児童が主体的に考え、協力して取り組むことが重要であり、その活動の過程で実感する達成感や成就感が感動体験につながっていると考える。具体的には「隠れ家づくり」「野外炊事」「キャンプファイヤー」「火おこし体験」「カッター体験(漕艇体験)」である。また、「星空観察」などの自然とふれあう体験も感動体験につながる。さらに、3(8)オの児童が主体的に向き合える活動においても上位が「隠れ家づくり」「野外炊事」「キャンプファイヤー」となっていることから、各項目の結果に対する考察のとおりであると考えられる。加えて3(8)カの項目を考慮して自然学校に計画を立てると次のようになる。

表 36 自然学校の実施計画例（事前事後を含む）

事前①	役割分担、調べ学習等
事前②	<b>出前事業（ロープワーク体験・火おこし体験）（3(8)ーカ）</b> ※本校の指導主事が利用校の要請により訪問し、自然学校の充実を図るために事前学習等の支援を行う事業です。
自然学校 1日目	<b>入校前：カッター・カヌー体験（3(8)ーアイ）</b> 入校式
2日目	<b>午前：自然発見！クロスワード（3(8)ーウ）（120分）</b> 午後：小枝の鉛筆づくり（120分） 家族への手紙 夜：ナイトハイク
3日目	<b>1日：火おこし体験（3(8)ーカ）からの野外炊事（3(8)ーアイウエオ）</b> ※焼き板づくり（焼き） <b>夜：星空観察（3(8)ーエ）</b>
4日目	<b>1日：隠れ家づくり（3(8)ーアイウエオ）</b> <b>夜：キャンプファイヤー（3(8)ーアウエオ）</b>
5日目	午前：焼き板づくり（磨き・装飾） 退校式
事後	<b>情報発信（3(8)ーカ）</b> （新聞づくり、他学年及び保護者への報告会など）

本校の利用校には、事前事業として自然学校の充実に向けての支援を行っている。教職員を対象に、プログラムデザインについて（ねらいに応じたプログラムの作り方や効果的なアクティビティの取り入れ方、五感を使って自然にふれる体験活動の指導方法等）研修をしたり、児童対象には、プログラムに火おこしや隠れ家づくりが取り入れられていることが前提ではあるが、事前に火おこし体験やロープワーク実習を行ったりする。

カッター・カヌー体験については、兵庫県立円山川公苑もしくは兵庫県立海洋体育館で体験をしている。バス移動を伴い、経費節約のため主に初日もしくは最終日に計画しているため、今回は1日目に計画した。

2日目の「自然発見！クロスワード」は、本校敷地内を散策し、直接自然にふれあう活動の一つである。散策中に小枝を拾い、午後からの小枝の鉛筆づくりに用いるなど、ここでは活動のつながりを意識している。さらに、夜の活動としてナイトハイクを計画した。これは、懐中電灯のみの暗い時間帯に散策することで、自然発見！クロスワードで昼間に通った同じ散策路でも明暗によって感じ方の違いを実感することができるからである。

活動のつながりで考えると、3日目の火おこしからの野外炊事、また残り火を活用して焼き板づくりの板焼きを実施することも大切である。夜には星空観察を計画しているが、2日目夜のナイトハイクとどちらかの実施でも良いと考える。時間的には余裕のある計画だが、児童の実態を考慮し星空観察だけを計画しても、観察場所へ夜道を歩いていけば、少しはナイトハイク同様の体験はできる。

4日目に1日かけて隠れ家づくりを実施し、その夜にはキャンプファイヤーにより自然学校のふり返しをする。この場合は、カウンスルファイヤーもしくはキャンドルファイヤーでもよい。また、利用校によっては、1日目の夜にキャンプファイヤーで全員が自然学校を協力して頑張ることを誓い、4日目の夜にカウンスルファイヤーもしくはキャンドルファイヤーによりふり返ることも考えられる。

5日目には焼き板づくりの磨きと装飾を計画した。装飾のための材料を2日目の自然発見！クロスワードで自然物を拾っておくことも考えられる。

以上が今回の調査から考えるプログラムである。ねらいを明確にし、主体性のある活動、感動体験の機会の充実、ゆとりあるプログラムを考えることは（文献〔2〕）にも「自然学校充実に向けた4つの視点」としてまとめられている。さらに、（文献〔3〕）においても活動プログラムの工夫として挙げられている。その中で、ゆとりについて考えなければならない理由は、様々な活動を児童に体験させたいという教員の思いが強すぎて、その活動本来のねらいがあるにも関わらず、時間に追われ、活動させることで精いっぱいにならないようにするためである。ゆとりをもたせることで、児童にとっても時間に追われず、指導者に急かされずに余裕をもって活動に取り

組ませることができ、じっくり考え、時には仲間と協力し、時には一人でやり抜くような貴重な体験となるのではないかと考える。紹介した文献については、熟読したうえで、再度実施しているプログラムを見つめ直すきっかけにしていきたい。

## (2) 自然学校を実施するにあたっての環境整備について

3(12)イには、教員が実施期間中に苦心したことがまとめられている。その中で、教員間で円滑なコミュニケーションを図りたいが、携帯電話の電波状況が悪く、連絡手段に苦慮したとある。本校では、利用校と本校事務室との連絡手段として、無線機を貸し出している。複数台貸し出せば、利用校はその無線機で連絡を取ることができる。しかし、利用校が複数になった場合、チャンネルが1つであるため、無線機を所持している者全員が会話の内容を受信することができる。そのため、情報の内容には気を付けなければならない。そうすると、教員間での連絡をLINE等のアプリを利用する方が良いと学校は考えるのだが、その携帯電話の電波が弱いため、通信できないということになる。

自然学校推進事業は、学習の場を教室から豊かな自然の中に移して実施する(文献[4])ことを目的に挙げている。自然の中ということは、原則不便な場所に行くということであるから、携帯電話の電波が弱いことも考慮したうえで、学校は連絡手段を考えておく必要がある。しかし、実際には教員間だけではなく、児童が体調不良等となり保護者と連絡を取らなければならない場合もあるため、通信環境の整備は重要である。また一方で、県内小学校にはGIGAスクール構想による一人一台端末(以降「端末」)が整備されている。学校内で自由に活用できるよう整備されているが、学習の場として考えるのであれば、自然学校を実施する場所も同様ではないだろうか。そう考えると、野外体験施設でもWi-Fi環境を整えることも大切ではないかと考える。ネット環境が整った端末を所持するということは、百科事典を所持していることと同じであり、分からないことをその場で調べ、活動に生かすことができる。5日間常に所持するわけではなく、散策等必要な時にいつでも使用できるようにするということである。さらに、Wi-Fi環境を整えることは、学校の情報発信(ホームページ更新など)にも役立つと考える。現在は、学校が自然学校の様子をホームページに掲載する場合、教員の端末で編集し、ポケットWi-Fi等でインターネットに接続し更新している。あるいは、写真データを学校に転送し、学校で更新作業を行っている。(3)でも述べるが、Wi-Fi環境を整えることは、教員間の連絡手段も確保し、情報発信などがその場で実行できるため、教員の負担軽減にもつながる。さらに、日々学校で取り組んでいる端末を活用した学習を自然体験にも活用ができるため、自然体験とデジタルでの学習を融合するといったパラダイムシフトができるのではないかと考える。

以上より、野外体験施設でのWi-Fi環境の整備を提言したい。

## (3) まとめ

先述したとおり、今回の調査では実施期間について教員が考える「ねらいの達成、児童の成長の観点から、適当だと考える実施期間」について、4泊5日が大多数だった前回に比べ、2泊3日の割合が多くなった。

教員が考える有意義な活動(3(8)においての具体的な取組やプログラム)をプログラムに落とし込んだものが4(1)であるが、詰め込みすぎず、ゆとりあるプログラムとして実施する場合、どうしても4泊5日の実施期間が必要となってくることに對し、2泊3日を選択する教員が増えていることは、一見矛盾しているように見える。ここから考えられることは、4泊5日を実施することの意義を理解し、児童のためだと分かっているが、それでも2泊3日を選択せざるを得ないという、ある意味教員の悲鳴が表れているのではないだろうか。そのことが3(11)⑤の結果でも出てきているのではないかと考える。ただし、ここで考えないといけないことは、安易に実施期間を2泊3日にするのではなく、教員が有意義だと感じている自然学校を4泊5日で実施できるよう、負担感の軽減につながる策を考えることではないか。

人材及び予算の確保についての課題は、(文献[3])で述べているように、指導補助員のリーダーバンクを立ち上げ、救急員の確保についてはスキームを示している。その他には、支援を必要とする児童とその保護者に対し、不安をどう取り除くかの対応や、利用施設との連絡調整、しおりの作成など、必要な業務について、何を支援すれば教員の負担軽減につながるのか、その対策方法を講じることが、今後の課題であると考えている。

## 謝辞

最後になるが、アンケートに応じてくださった令和7年度利用校の先生方には、心からの敬意と感謝の意を表します。

## 文献

- [1] 樋口耕一. 2020. 社会調査のための計量テキスト分析ー内容分析の継承と発展を目指してー第2版. ナカニシヤ出版.
- [2] 兵庫県教育委員会. 自然学校活動プログラム指導資料. 兵庫県教育委員会;2019.
- [3] 兵庫県教育委員会. 持続可能な自然学校の充実に向けて. 兵庫県教育委員会;2025.
- [4] 兵庫県教育委員会. 令和7年度自然学校推進事業実施要項. 兵庫県教育委員会;2025.

(コメンタリー) ※コメンタリー (Commentary) は、既存の論文、書籍、レポートに注目を集めたり批評を加えたりするための小論文です。対象とする論文・書籍・レポートの興味深い点や、読むことでどのようなメリットがあるかを説明します。

## 学校は教員の悲鳴にどう応えるのか

兵庫県立南但馬自然学校調査・研究委員会

三田市立三田小学校長  
足立延也

自然学校が始まった頃の学校現場を知る教職員は少なくなった。当時、野外活動施設の整備不足や教員の労働環境の問題などから5泊6日の自然学校に反対する教員の声が多量に上がったことを思い出す。そんな初期の課題を乗り越え、そこに教育的価値を見出した教員の地道な教育実践の積み上げによって、自然学校は、他に類を見ない体験活動の場となり、今日まで連続と受け継がれてきた。その自然学校が一つの節目を迎えていると感じる。ここでは、コロナ禍が明けて3年が経過した自然学校の課題と、学校がその課題にどう向き合うのかを考えてみる。

### 教員の意識の変化をどう捉えるのか

コロナ禍明けの令和5年度に県内ほとんどの市町で自然学校は4泊5日に戻った。第17号掲載の令和5年調査では「望ましいと考える自然学校の実施期間」の問いに、多くの教員が「4泊5日」と回答している。その上で、第17号のコメンタリーでは、「学校管理職が安心感を取り戻し、自然学校を通して付けたい力の実現をめざす教員を支えることができる実施環境さえ整えば、今後も持続可能な自然学校にすることができる」と述べた。ところが、本研究の令和7年調査では、教員が「適当だと考える実施期間」の問いに2泊3日と回答した割合が4泊5日とほぼ同じ割合になっている。

本研究では、この教員の意識の変化を「4泊5日で実施することの意義を理解し、児童のためだと分かっているが、それでも2泊3日を選択せざるを得ないという、ある意味教員の悲鳴が表れているのではないだろうか」と述べている。「自然学校において困ったことや苦心したことについて」の回答からも学校の課題に苦心しながら自然学校を進める教員の悲鳴が聞こえてくるように感じる。

### 学校が直面している自然学校の課題

教員の悲鳴はどこから来ているものなのか。この2年で学校の課題はどのように変化しているのか。第17号のコメンタリーで示した学校が直面している自然学校の課題を基に考えてみる。

#### 【4泊5日の自然学校を行う学校の体力】

第17号では「コロナ禍の規模を小さくした自然学校では、学級担任と少人数の教員で実施できていた。そこから、学校全体での指導体制に戻すには、事前の教員間の連絡調整や準備に予想以上の時間と労力を要することになった。長距離を走る体力が回復しないまま、長距離を走り出したような感覚が残っている。」と述べた。それから2年、4泊5日の自然学校を行う学校の体力は回復したのだろうか。

令和7年調査から担任の負担は変わらず大きいままであることが窺える。学校では、感染症の流行が続き、産休・育休や病休の代替教員が配置されない教員不足が慢性化している。日々の生徒指導や保護者対応に追われ、担任が他の教員に応援を求めづらい状況が続いている。本研究3(11)①「20代教員」の回答で2泊3日が多いことから、先が見通せない若手教員が不安感や負担感を募らせていることが推察される。

### 【コロナ禍に明らかになった多様な課題がある児童への対応】

学校では多様な課題がある児童への個別の支援体制が一層進んでいる。文部科学省問題行動調査では令和6年度の不登校が小中学生で約35万人に上っている。各地域で校内サポートルームの整備などが進んでいる。令和7年調査からも多様な課題がある児童に対応する教員の課題意識が見えてくる。自然学校の部分参加など個別の配慮を行うことで参加できる児童が増えてきたことは成果であるが、様々な個別支援が進んだ一方で、担任の配慮事項も増えてきている。

### 【自然学校で利用する施設確保の不安】

本研究3(11)⑤で「阪神」と「丹波」の教員の回答は、2泊3日が4泊5日を大きく上回り、他の地域と異なる状況を示している。この2地区に共通する課題に施設利用の不安が挙げられる。数年前、この地区の多くの学校が利用してきた野外活動施設が閉鎖した。その結果、慣れない施設での様々な調整に時間と労力を要し、想定外のトラブルや諸対応に苦心する状況が続いている。今後も毎年異なる施設の利用を余儀なくされる学校もあり、先が見通せない不安が少なからず回答に影響していると推察される。

## 学校が今できることを学校単位で進める

### 【デジタル端末を活用した自然学校の取組～自校の取組から～】

感染症が同時流行した時期に実施した自校の自然学校では教職員の指導体制の確保が課題となった。この経験を踏まえ、自校ではデジタル端末を活用した自然学校の取組を進めている。自然体験とデジタル端末は相容れないように感じられるが、児童が使い慣れたデジタル端末を活用することで、児童の主体的な問題解決場面を増やし、教員が直接、指示・指導する場面を少なくできると考えた。そのことで、少ない教員による指導体制の実現を目指した。アプリの開発は連携する大学の研究室に依頼し、デジタル端末の準備は市教育委員会に協力を求めた。これまで4つのプログラムで活用を進めている。今後、野外活動施設のWi-Fi環境が整っていけば、さらに教員の負担軽減が期待できる。



この夏、若い頃にお世話になったかつての教頭先生が空襲体験を語る会があると知り、出会いに行った。30年ぶりの教頭先生との再会は自然学校の話で始まった。「先生に会うと、あの夜のサイクリング思い出すわ」から始まり、「無茶な計画をよく許可くださいましたね」と返すと、「あんなことをしようとした先生の方がすごいよ」と返された。かつて、学校には自然学校請負人がいた。私もその一人。牧場や農園を巡るサイクリングを毎年担当した。前述の「無茶な計画」は教員5年目の話である。自分でかまどを組む野外炊事と自分で張ったテントで泊まる体験をさせたいと思い、施設から10キロ離れたグラウンドへのサイクリングを計画した。ところが、当日、野外炊事を終えた頃から雨天となった。テント泊は断念し、急遽、引き返すことになった。暗い雨の中でペダルを踏み続けたことを覚えている。かつての教頭先生と2人、あの日の河川敷に続く自転車灯の長い列を思い返していた。自然学校が一つの節目を迎えている。かつての教頭先生がそうであったように、今度は自分が若い教員のやりたい自然学校を支える番になったことを感じている。

## 資料2 質問紙(Webフォーム)

### 【教員用】令和7年度 自然学校推進事業の充実に向けたアンケート

県立南但馬自然学校利用校の特別支援学級担任を含む5年生担任の皆さま

県立南但馬自然学校調査・研究委員会

本校では、自然学校推進事業の充実に向けた取組についての調査・研究を行っています。今年度の貴校の取組、児童の変容、ご自身の変化等につきまして、以下のアンケートにご協力をお願いいたします。

実際の活動内容とも対比させた分析のために学校名を記入していただけますが、調査結果は統計的に処理されるため、のちに学校や個人が特定されることはありません。ご協力のほど、よろしくお願いたします。

調査・研究委員会 委員長 高見和至

1. 学校名 (○○○立○○○○) \*

2. あなたの年齢を教えてください。(数字のみ入力してください。例：35歳の場合は、半角「35」を入力してください。)\*

3. 教職年数(例：「5年目」の場合は、半角「5」を入力してください。)\*

4. 5年生担任としての自然学校の引率回数(「3回目」の場合は、半角「3」を入力してください。)\*

5. あなたは、通常学級の担任ですか。特別支援学級の担任ですか。\*

- 通常学級の担任  
 特別支援学級の担任

6. あなたの勤務校について、5年生は単学級ですか。複数学級ですか。\*

- 単学級  
 複数学級

7. あなたの勤務校では、自然学校は連合(複数校)で実施しましたか。それとも単独(自校のみ)での実施でしたか。\*

- 連合(複数校)で実施  
 単独(自校のみ)で実施

自然学校を通して、次の取組やプログラムをどの程度実施することができましたか教えてください。

8. 失敗体験を成功体験につないでいく取組やプログラム\*

- できた  
 ややできた  
 あまりできなかった  
 できなかった

9. 「できた」「ややできた」と考えた、具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

自然学校を通して、次の取組やプログラムをどの程度実施することができましたか教えてください。

10. 困難を乗り越える取組やプログラム\*

- できた  
 ややできた  
 あまりできなかった  
 できなかった

11. 「できた」「ややできた」と考えた具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

自然学校を通して、次の取組やプログラムをどの程度実施することができましたか教えてください。

12. グループ活動を取り入れた取組やプログラム \*

- できた
- ややできた
- あまりできなかった
- できなかった

13. 「できた」「ややできた」と考えた具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

自然学校を通して、次の取組やプログラムをどの程度実施することができましたか教えてください。

14. 感動体験を得られる取組やプログラム \*

- できた
- ややできた
- あまりできなかった
- できなかった

15. 「できた」「ややできた」と評価した具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

自然学校を通して、次の取組やプログラムをどの程度実施することができましたか教えてください。

16. 児童が主体的に向き合える活動を設定した取組やプログラム \*

- できた
- ややできた
- あまりできなかった
- できなかった

17. 「できた」「ややできた」と考えた具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

自然学校を通して、次の取組やプログラムをどの程度実施することができましたか教えてください。

18. 事前・事後学習活動の充実 \*

- できた
- ややできた
- あまりできなかった
- できなかった

19. 「できた」「ややできた」と評価した具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

今回の自然学校を終えて、児童、学級に対して得られた効果について質問いたします。次の項目について当てはまるものを選んでください。

20. 自分の力（自分たちの力）で解決しようとする態度 \*

- ある
- ややある
- あまりない
- ない

21. 自然学校のどのような取組やプログラムが影響を与えましたか。具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

今回の自然学校を終えて、児童、学級に対して得られた効果について質問いたします。次の項目について当てはまるものを選んでください。

22. 友達づくりや友人関係の深まり \*

- ある
- ややある
- あまりない
- ない

23. 自然学校のどのような取組やプログラムが影響を与えましたか。具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

今回の自然学校を終えて、児童、学級に対して得られた効果について質問いたします。次の項目について当てはまるものを選んでください。

24. 学級全体のまとまり、雰囲気の向上 \*

- ある
- ややある
- あまりない
- ない

25. 自然学校のどのような取組やプログラムが影響を与えましたか。具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

今回の自然学校を終えて、児童、学級に対して得られた効果について質問いたします。次の項目について当てはまるものを選んでください。

26. 自然に対する興味関心の向上 \*

- ある
- ややある
- あまりない
- ない

27. 自然学校のどのような取組やプログラムが影響を与えましたか。具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

今回の自然学校を終えて、児童、学級に対して得られた効果について質問いたします。次の項目について当てはまるものを選んでください。

28. 教員と児童との良好な関係性の深まり\*

- ある
- ややある
- あまりない
- ない

29. 自然学校のどのような取組やプログラムが影響を与えましたか。具体的な取組やプログラムを教えてください。\*

30. 指導者として今年度の自然学校を経験されたご自身の変化について質問いたします。ア～クの各項目にあてはまるものを1つお選びください。\*

	0 ない	1 あまりない	2 ややある	3 ある
ア 児童についての新たな発見	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
イ 児童の実態に応じた実践的指導力の向上	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ウ 児童理解の深化を生かした学級経営の充実	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
エ 職場内でのコミュニケーションの良化	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
オ 教員としてのやりがいの実感	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
カ 学校行事を企画、運営していく力の向上	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
キ 保護者とのコミュニケーション力の向上	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

31. 今後の自然学校の実施期間について質問いたします。ねらいの達成、児童の成長等の観点から、実施期間として適当と思われるものを次のア～キから1つお選びください。\*

- ア 日帰り（日帰り複数回を含む）
- イ 1泊2日
- ウ 2泊3日
- エ 3泊4日
- オ 4泊5日
- カ 5泊6日
- キ 6泊7日以上

32. 回答について、ねらいの達成、児童の成長等の観点から、理由をお書きください。\*

33. あなたが、自然学校出発当日までの準備段階で、最も困ったこと、苦心したことを教えてください。\*

34. あなたが、自然学校実施期間中に、最も困ったこと、苦心したことを教えてください。\*

35. 特別な支援を要する児童に対し、自然学校出発前まで、実施期間中で最も困ったこと、苦心したことを教えてください。\*

36. 自然学校の充実に向け、今後ご自身が特に意識して取り組みたいと思われるものを次のア～カからすべてお選びください。\*

- ア 自然学校と各教科等との関連を図る取組
- イ 事前・事後の学習活動
- ウ 学校では得難い体験活動
- エ 社会性や自立性等を育むための集団活動
- オ 子どもの成長過程を踏まえた体験活動
- カ 家庭や地域との一層の連携を図る取組

37. 自然学校の充実に向けたご自身の指導力向上のために、研修してみたいと思われることがありましたら、具体的な内容をお書きください。本校のアクティビティ等を参考にさせていただいてもかまいません。

\*

〈例〉 「もみじがり」「紙すき体験」「隠れ家づくり」「竹田城跡登山」「野外炊事」



## 関係者一覧

### 研究報告

#### 兵庫県立南但馬自然学校調査・研究委員会

高見 和至	神戸大学大学院教授
伊原 久美子	大阪体育大学教授
甲斐 知彦	関西学院大学教授
亀山 秀郎	学校法人七松学園 認定こども園 七松幼稚園・園長
石丸 京子	尼崎の森中央緑地パークセンター生物多様性コーディネーター
足立 延也	三田市立三田小学校長

---

#### 兵庫県立南但馬自然学校

西岡 智也	兵庫県立南但馬自然学校校長
西口 元浩	兵庫県立南但馬自然学校主任指導主事兼指導課長※
佐藤 貴康	兵庫県立南但馬自然学校主任指導主事※
深田 東磨	兵庫県立南但馬自然学校指導主事※
福岡 麻衣	兵庫県立南但馬自然学校指導主事※
山本 雅裕	前兵庫県立南但馬自然学校主任指導主事兼指導課長※
田中 昌史	前兵庫県立南但馬自然学校主任指導主事※

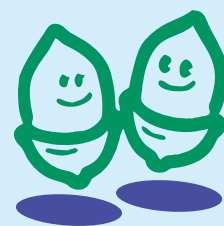
※は、兵庫県立南但馬自然学校調査・研究委員

兵庫県立南但馬自然学校

# 研究紀要 第18号

令和8年3月発行

発行 兵庫県立南但馬自然学校  
〒669-5134 兵庫県朝来市山東町迫間字原 189  
TEL 079-676-4730・4731  
FAX 079-676-4008  
<http://www.shizengakko.jp/>  
Eメール Mtajimashizen@pref.hyogo.lg.jp



兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO  
Nature Education Center

リサイクル適性 **(A)**

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。

07教<sup>Ⓘ</sup>1-016A4